學　報
Kobe　College　Bulletin

ISSN0389－164X
NO. 1 7 2
2014.12. 9
神戸女学院
学報委員会

「温 故 知 新」

中学部・高等学部　部長　林　真理子

今年４月に中高部 部長職を拝命いたしました、林　真理子です。中高部・大学の文学部英文学科で10年間学んだ後、公立高等学校英語教員としての経験を経て母校に戻ってまいりました。Ｊ１から生徒の立場で学んだクルー・メソッドを、今度は教える立場から再度学び、在校生が楽しく４技能の調和のとれた英語を学ぶお手伝いをすることができますことは、英語教員として最高の名誉でもあり、やりがいでもあります。また卒業生教員の一人として、めぐみ会の理事を約５年半務めさせていただき、同窓生の皆様の神戸女学院に対する熱き想いと貴い献身について学んだことも感謝でございます。

私にとって2014年度のテーマは「変えるべきものと変えてはならぬもの」です。４月の就任の辞の中で、次のように誓約いたしました。「現在、めまぐるしく変化する社会において、ライフスタイルや考え方、価値観の変革やグローバル化が叫ばれる一方、伝統的な価値観や倫理観への回帰も顕著になっています。特定の文化圏に固有の価値観を学ぶことは意義深いことではありますが、それが排他主義や偏ったナショナリズムに陥ると、隣人との関係を損ない、緊張関係が生じてしまいます。神戸女学院にも、この激動の波は押し寄せています。変えずに守り抜くべきものと、柔軟に変えることを決断すべきものを選ぶよう迫られることも多いでしょう。『愛神愛隣』をモットーに、建学の精神であるキリスト教にもとづいた全人的教育を展開してきました貴い伝統や建学の精神は、いつの世にあっても固く守っていかねばならない神戸女学院の根幹であり、不変の真理です。しかしまた同時に、世界の舞台でリーダーシップを発揮すると同時に隣人に仕え、神様のよびかけに応じる優れた女性を育成するために、柔軟な変革の決断を下さなければならぬ場合もあると存じます。そのようなとき、中高部の生徒たちが折に触れて暗誦しています、ラインホールド・ニーバーの “The Serenity Prayer” を覚えます。『変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気を与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたま

え。』神様の示してくださる真理を見分けることのできる知恵を与えられるよう、この祈りを日々唱えてまいります。」

日々の慌ただしさの中でなかなかこの誓いを果たすことができておりませんが、８月から９月にかけて「変えるべきものと変えてはならぬもの」について学ぶ機会が与えられました。

その第１は９月にシカゴで開催されたKCC-JEE年次総会への出席でした。中高部では、英語科のガチョック・ティーチャーの派遣やミネソタでの夏期語学研修旅行のホストファミリ―のお世話など、KCC-JEEの皆様にひとかたならぬお世話になっているのですが、シカゴで直接理事の皆様にお目にかかり、色々なご意見を直接伺うことができたのは、貴重な経験でした。特に今年の総会には、アメリカ全土やコスタリカにお住まいの多くの卒業生の皆様が駆けつけてくださいました。総会終了後、KCC-JEE会長　杉浦 剛様ご夫妻のご厚意で、リユニオン（プチ同窓会）を開催していただき、心温まるひと時を過ごすことができました。海外で目覚ましいご活躍をなさっている皆様が、異文化圏へ飛び込む覚悟、海外生活でのご苦労なども交えて感銘深いお話しをしてくださいました。また、常に母校を覚え、物心両面でお支えくださり、学生・生徒の活躍ぶりを称えてくださる皆様の熱い心に触れ、感謝とともに身の引き締まる思いがいたしました。神戸女学院がグローバル・リーダーとして多くの卒業生を世界に送り出していることを誇りに思うと同時に、支援者の皆様が励ましの祈りを合わせてくださっていることを常に覚え、その信頼に応えるべく邁進しなければならぬと肝に銘じました。

２番目の経験は９月２日、３日の２日間にわたって持たれた中高部教職員研修会の教科プレゼンテーションです。各教科がいかに工夫を凝らして神戸女学院の自然や伝統を大切にしながら、神戸女学院ならではの授業を展開しているかと言うことが確認でき、「温故知新」と言う言葉に想いを馳せました。

国語科の授業では、確かな読解力・表現力を培うことを目指しつつ、時には詩や俳句を制作したり、百人一首に親しんだり、硬筆・毛筆による書写も行っています。読書感想文コンクールでの入賞も多く、読書を愛する本校生ならではと言えるでしょう。社会科では、高等学部の倫理の「アナログ・ツイッター」の実践で、自由な意見交換・生徒の自主的問題提起・知的探究という本校が大切にしてきた学習を基礎にしつつ、新しい試みに挑戦しています。数学科では、低学年から、きめ細かい指導や課題提出により、論理的に考える楽しさをインタラクティブに教える工夫を重ねた結果、数学に情熱を持つ生徒が増え、数学甲子園や数学オリンピックなどへの挑戦も増加しています。理科では、岡田山の豊かな自然観察・実験を通して、難解な理論をより深く理解し、考えることの楽しさを学ぶという本校の伝統が大切にされています。その一方で、授業で英語や日本語の学術論文を取り扱う、校外学習を取り入れるなどの新しい試みも実践されています。音楽では伝統の讃美歌教育やクラシック音楽の鑑賞や演奏・歌唱に加え、和太鼓の演奏などにも挑戦しています。美術ではキャンパスの写生・植物観察など、本校ならではのカリキュラムに加え、本の装丁や立体造形など多様な製作活動を目指しています。英語科では、クルー・メソッドの礎の上にシャドウイング・S２とＪ１のジョイント授業、多読プログラム、プレゼンやエッセーライティングなどを導入し、より高度でインタラクティブな授業を展開しています。保健体育では従来の球技・ダンス・陸上の実技に加え、ソフトボール・サッカー・柔道等も加味し、心肺蘇生法による人命救助実技研修からストレス対応法についてのグループワークまで幅広く授業展開しています。技術・家庭でも「聖書讃美歌袋」作成や岡田山の自然を生かした調理実習など、本校の生活に根付いたカリキュラムを展開しています。聖書科では聖書・神戸女学院の歴史・様々な課題についての授業を通して、生徒達が「愛神愛隣」の実践者として応答的に生き方を考える機会を提供しています。これからも全校一丸となって「愛神愛隣」の不変の真理を守りつつ、新しい視点に対応できる柔軟性・開放性を目指してまいります。

「重要文化財　神戸女学院」指定記念行事報告

９月18日（木）、５月16日（金）の文化審議会文化財分科会の答申以来待つこと４ヶ月、官報号外第207号に、文部科学省告示第131号として、神戸女学院の12棟を国の重要文化財に指定する件が掲載されました。

10月３日（金）　重要文化財指定記念礼拝
「岡田山での魅力―神戸女学院の教育」
講師　神戸女学院大学名誉教授　茂　洋 先生

神戸女学院大学金曜日公開プログラムの時間に指定記念礼拝が守られ、茂先生は「岡田山で、一人の人間として、常に自分自身の成熟を深めながら、永遠の神に包み込まれながら歩んでいけるように、それが神戸女学院の総合的教育の目的です。どうぞ豊かに成熟してください。」というメッセージを学生・教職員一同に贈ってくださいました。

10月９日（木）、指定記念講演会を控えたこの日、「重要文化財指定書」が届きました。

建第二六一二号
重要文化財指定書
神戸女学院　一二棟
右を重要文化財に指定する
平成二十六年　九月　十八日
文部科学大臣　下村博文

10月９日（木）に届いた「重要文化財指定書」

10月12日（日・創立記念日）
重要文化財　神戸女学院　指定記念講演会
主催：学校法人 神戸女学院
後援：兵庫県教育委員会　西宮市教育委員会

飯 謙学長・学院チャプレンの司会により始まった記念講演会、森 孝一理事長・院長は挨拶の中で、キャンパスの設計、建築、維持、保全をお支えくださったみなさまへの感謝を述べました。またご来賓のみなさまから温かいご祝辞を頂戴いたしました。続いて、３人の講師による講演が行われました。

東京藝術大学大学院教授の長尾 充氏は、「神戸女学院　重要文化財へ」という題で、今年３月まで文化庁で、神戸女学院を含む文化財調査に実際に携わってきた方ならではの、文化財指定までのいきさつを語ってくださり、「これからも、これまで通り大切にしてください。」と結ばれました。今春大学に籍を移されたことによりこのご講演が実現したことは、学院にとって本当に幸いなことでした。

大阪芸術大学教授で、ヴォーリズ建築の研究者として名高い山形政昭氏は、「重要文化財指定を受けて思うこと」という題で、初めて神戸女学院の正門をくぐってキャンパスを訪問した時の思い出から説き起こされ、「空の広さが変わっていない」など、建築と環境がともに維持されることで、創建時の女学院スピリットが今も鮮明に表現されているとお話しくださいました。

石田忠範建築研究所代表で、元ヴォーリズ建築事務所所長で学院の評議員でもある石田忠範氏は、「神戸女学院建築のこころとかたち―愛神愛隣―」という題で、ヴォーリズの設計理念が、神戸女学院の永久標語「愛神愛隣」に相通じるものであることをお話しくださいました。

台風の影響が心配されましたが、少し風は強かったものの、好天に恵まれ、およそ650人の方にご来場いただき、また見学会には約300人のご参加がありました。ご案内役はこの日がデビューとなる18名のツアー・マイスターがつとめました。

（院長室課長）

「重要文化財神戸女学院」ヴォーリズ建築の一般公開について

今年５月に、神戸女学院岡田山キャンパスの12棟の建物が国の重要文化財に指定されることになり、ヴォーリズ建築の見学希望者が増えることが予想されたため、急遽一般公開日を設け、大学ホームページに案内を掲載しました。公開日を今年度内に11日設定し、各日２回ずつ説明付の見学ツアーを実施しています。今まで３日間の公開日があり、１日当たり50人以上の参加者がありました。

学外からのキャンパス見学は、個人、団体を含め、これまでも年間50件ほどあり、授業、学校行事に差支えがないときに個別に受け付けていましたが、キャンパスマップ等の資料を渡すだけで詳しい説明付の案内はしていませんでした。

今年から一般公開日に見学ツアーを実施することになり、学生から希望者を募り、学院の歴史やヴォーリズ建築についての講習を受けたうえで“ツアー・マイスター”として案内を担当してもらうことになりました。７月から講習を受け、現在28人が登録しています。10月12日の「重要文化財神戸女学院」指定記念講演会でツアー・マイスターとしてデビューしました。

急いで計画したため、試行錯誤しながらの実施ですが、日程、内容などを改良して、より広く神戸女学院とヴォーリズ建築を知っていただけるものにしたいと思います。

（総務課長）

ツアー・マイスターのバッジ

神戸女学院家庭会報告

個人情報保護のため、
一部削除しています。

春季公開講座報告

2014年度春季公開講座を、今年度は「初夏の公開講座」として開催いたしました。インターネットの爆発的な普及により、私たちの生活は革命的な変貌を遂げています。利便性が飛躍的に向上するいっぽうで新たな問題も様々な場面で生まれています。今回の共通テーマは「情報化社会の光と影」。情報化社会の好ましい側面、特にその裏面について、三人の先生方の専門領域から語っていただきました。

第１回　６月14日（受講者数117名）

人間科学部、環境・バイオサイエンス学科教授で情報工学がご専門の出口弘先生による「インターネットの光と影」と題したお話でした。不正アクセスや詐欺などの犯罪、個人情報の流出、プライバシーや著作権の侵害、ネット依存症や情報格差など、インターネットの登場によってもたらされた多種多様な問題について、本学情報処理センター・ディレクターも務めておられる専門家として貴重な話をいただきました。

第２回　６月21日（受講者数90名）

文学部、総合文化学科教授で古代ギリシア哲学がご専門の高橋雅人先生にお話しいただきました。タイトルは「情報発信と情報管理：古代ギリシアの視点から」。ネット上に発信される情報の適切な管理がますます求められる現代。発信と管理のバランスはどうとるべきか、発信と管理が私たちに与える影響とは。古代ギリシア人の遺した悲劇や哲学から読み取ろうとする試みでした。古代と現代、人文知と情報テクノロジー。かけ離れているように見える二者を結び付けての興味深い講演でした。

第３回　６月28日（受講者数　95名）

インターネットの暗部は学校など子供たちの世界にも広がっています。人間科学部、心理・行動科学科教授でスクール・カウンセリング等をご専門にされている小林哲郎先生に「ネットいじめと子どもの心」についてお話を伺いました。いじめの実態やメカニズム、その心理についての解説に始まり、様々ないじめについて具体的なデータを紹介しつつ分析を加えるというものでした。日本と英国におけるいじめに対する反応の違いなど、比較文化／比較社会論的な視点からの指摘もあり、大変興味深いものでした。

（生涯教育委員会委員長）

個人情報保護のため、
一部削除しています。

学院リトリート報告

今年も学院リトリートを７月25日（金）に行ないました。参加対象者は教職員です。学院リトリートとは、学院全体でキリスト教主義と建学の精神について学ぶことを目的としています。なかなか落ち着いて考えることが難しい中、日常の業務から少し離れ、キリスト教を軸に、いろいろな視点から私たちの働きの場について考えることができればと願って設けられたプログラムです。

今年も昨年に引き続き、『神戸女学院宣教師―建物の名称を追って―』と題し、学内の３名の講師にお話しいただきました。宣教師として来られ、本学にとって欠かせない存在となられた先生方について、改めてその功績と志しについて考えるひと時となりました。お忙しい中、発題をお引き受け下さいました３名の講師の方々に、心より感謝申し上げます。

３名の講師の方々からは、皆さん楽しく分かり易いお話しをいただき、出席者の方々に大変好評でした。その後のプログラムでは、お話しを受けて近くに座った教職員が、懇親を兼ねて学院について語り学び合う良い機会となりました。

日　時　　2014年７月25日（金）　14:00～16:00
場　所　　メアリー･アンナ･ホルブルック記念館　301号室
参加者　　118名　　司　会　　飯　　謙
発　題　　『神戸女学院の宣教師―建物の名称を追って―』
・Susan Annet SEARLE 先生　　院長室課長
・Mary Elizabeth STOWE ＆
　Grace Hannah STOWE 先生　　中高部長
・Virginia Alzade CLARKSON 先生　　史料室職員
（チャプレン室）

秋季公開講座報告

2014年度の秋季公開講座を開催いたしました。今回の共通テーマは「神戸女学院の教育」でした。本学院における教育の内容や方法にとどまらず、その教育の舞台となる岡田山キャンパスという環境を視野に入れてのテーマ設定でした。岡田山キャンパスの複数の建造物が国の重要文化財に指定されたことを受けてのことでした。

第１回　10月11日（受講者数73名）
中学部、高等学部で長年教鞭をとられた大川徹先生にお話しいただきました。タイトルは「Vories さんのキャンパスプラン」。ヴォーリズの教育観から、それに基づくプランの詳細、満喜子夫人との関連などをお話くださいました。このキャンパスで教育にあたられ、本学院の環境保全委員会の委員長を務められるなど、本学キャンパスの美化保全に尽くされた先生ならではのお話だったと思います。

第２回　10月18日（受講者数49名）
人間科学部、環境・バイオサイエンス学科の三宅志穂先生にお話しいただきました。先生は「地域資源を通して学ぶ科学する心」と題して、学校だけに限らない学びについて講演してくださいました。地域には自然環境をはじめ、博物館などの施設、各種の専門家などがおり、教室以外の場で私たちの学びを刺激してくれています。そうした資源から「科学する心」がいかに伝えられるのか、様々な事例を紹介しながらお話しいただきました。

第３回　11月１日（受講者数49名）
文学部、英文学科で英語教育の指導に尽力されてきた本学元学長、原田園子名誉教授よりお話いただきました。タイトルは「神戸女学院の英語教育」。本学の英語教育は1873年神戸にあった小さな私塾での英語指導に始まる長い歴史を有するものです。140年も続く本学における英語教育の流れを概観し、女学院の英語教育に一貫して見られる姿勢、その特徴を探るというお話でした。本学の伝統とその精神に思いを馳せる貴重な機会となりました。

生涯教育委員会では、来年度も春と秋に公開講座を予定しています。詳細については改めて案内させていただきます。よき知的刺激と新たな出会いの場となるよう努めてまいりたいと思います。

（生涯教育委員会委員長）

2014年度　宗教強調週間

プログラム

〈11月10日～11月14日〉

11月10日（月）
早天祈祷会　文学部 総合文化学科　3年生
中高部礼拝　学長・学院チャプレン　飯　謙
チャペルアワー　飯　謙

11月11日（火）
早天祈祷会　高等学部　3年生
中高部礼拝
「真のチャンピオン」
金城学院大学人間科学部教授　深井　智朗
チャペルアワー
「自由になったあとで」　深井　智朗
全教職員礼拝
「二つの愛」　深井　智朗

11月12日（水）
早天祈祷会　文学部 英文学科　2年生
中高部礼拝
「Because I am a girl」
産婦人科医・JICA 短期専門派遣員・高106回
松本　安代
チャペルアワー
「祈り」　松本　安代
中高部 PTA のための宗教講話
「今、与えられた恵み」　松本　安代
学生寮　夕拝
「人間であるために」
日本基督教団扇町教会牧師　山田　真理

11月13日（木）
早天祈祷会　高等学部　3年生
中高部礼拝
「態度に示して生きましょう」
早稲田大学名誉教授　木村　利人
チャペルアワー
「平和のうちに生きましょう」　木村　利人
同窓生のための宗教講話
「いのちの喜び」　木村　利人

11月14日（金）
早天祈祷会　音楽学部 音楽学科　4年生
中高部礼拝　音楽礼拝
ゴスペルシンガー　上原ヨシュア

アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」
～モーツァルテウム音楽大学から Roczek 教授と学生達をお招きして～
Paul Roczek 他学生2名
辻井　淳
林　裕
Xavier Luck
佐々由佳里

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、金城学院大学人間科学部教授であり、宗教主事として日々学生達にキリスト教を教えておられる深井智朗氏。本学中高部ご卒業後、産婦人科医として勤務しつつ、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）から派遣されバングラディッシュでの奉仕活動や、JICA より派遣されカンボジアやブルンジ等に短期専門家として母子保健や妊産婦・新生児ケアのために働かれる松本安代氏。タイ、ベトナムで教鞭をとられた後、バイオエシックスのパイオニアとしてジュネーブ大学などで教鞭をとられ、国際バイオエシックス学会及び日本生命倫理学会の設立理事会の一員として国際的にもバイオエシックスの展開に貢献された早稲田大学名誉教授の木村利人氏。以上の3名の先生を講師としてお迎えしました。

11日（火）は深井智朗先生が「自由になったあとで」と題してお話しくださいました。深井先生は、早稲田大学で教鞭をとられた時のことをお話しされながら、自由になることが問題ではなく、与えられた（手に入れた）自由をどのように使うかが問われている、ということを提示されました。高校時代とは違い、大学生になった途端、自由に生きることの難しさ、使い方が分からない学生が多いことを話され、自分で決断できるようになる自由の訓練をどこでするのか、それは、このミッションスクールでは礼拝にて学ぶのであり、そして自由の訓練を受けた人は、誰かのために自由を使うということを話されました。キリスト教や聖書を通して真の自由の使い方を身につけ、自由であるがゆえに、隣人に仕える

人になってほしいとお話しされました。

12日(水)は松本安代先生が「祈り」と題してお話しくださいました。バングラディッシュとブルンジで活動していた時に出会ったマラリアに罹った妊産婦との出来事から、どのようなことが起こっても全てを受け入れ、神に感謝し、祈りをもって過ごすことの大切さと、医療従事者として、自分で何とかしようとする傲慢さに気づくとともに、現地の従事者がどんな時でも祈りを忘れないという従事者としての姿勢を改めて考えさせられました。皆さんはこれからの歩みの中で色々な出会いがあるかと思いますが、どのような出会いも神さまが与えてくださったものであると大切にし、そして最も大切な、祈りをもって何事も真摯に向き合うことを忘れずに過ごしてほしいと締め括られました。

13日(木)は木村利人先生が「平和のうちに生きましょう」と題してお話しくださりました。戦後15年頃、学生の時にフィリピンにワークキャンプに行き、そこで初めて、東南アジアでの戦争と、現地での惨殺を知りました。最初は厳しい態度だった現地の人も、ワークを通して少しずつ話しをするようになり、そのようなお互いを思いながら、未来を創ろうと作詞した歌が「幸せなら手をたたこう」だとお話し下さりました。その後ベトナム戦争中にサイゴンで教鞭を取られたことからバイオエシックスについて強く必要性を感じ、その研究と展開を進めました。平和について強くその必要性を説かれ、愛を態度に示すことの大切さを話されながら、神戸女学院という素晴らしい環境の中でこれからもしっかり学んでほしいと締め括られました。

11日の全教職員礼拝では、深井智朗先生に励ましのメッセージをいただきました。また続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

遠方からお越しくださり、一日に何度も講演してくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

＜中高部礼拝＞

1日目は学院チャプレンである飯先生に、重荷を主にゆだねて生きることについて奨励をしていただきました。なぜ永久標語が愛神愛隣なのか、そして神戸女学院で学ぶことができている意味について、普段から深く考えて生活していくべきだと感じました。

2日目は深井智朗氏が「真のチャンピオン」と題したお話で、ベトザタの池の物語を通して、真のチャンピオンとは、ただ勝負に勝つことではなく、誰かの為に戦うことだと教えてくださいました。「誰かの為に」という行動は、簡単そうで意外と難しいものです。ひとりひとりが自覚しながら生活することが重要だと、改めて気付かされました。

3日目は松本安代氏にお越しいただき、産婦人科医としてバングラデシュで働いておられた経験などを交えながら、世界の子供たちの現状についてお話ししていただきました。私たちと同世代の子供が自由を得られず、親として生活していること。一方の私たちは、自分の努力次第で自らの道を開くことができる、恵まれた環境にいること。そのことを自覚しつつ、日本で生まれた私たちには何ができるのかを頭に入れながら生きていくべきだと感じました。

4日目に来てくださった木村利人氏は、心に響く様々な言葉を交えながら、これからの人生、そして世界のあり方についてお話をしていただきました。『「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た」(ヨハネの黙示録 21章1節)という聖書箇所のように、人生は道が開けていくものである。』『どんな小さいことでも、続けることで、積み重ねることで、大きな力となる。』というような言葉や、木村氏が作詞された「幸せなら手をたたこう」には、平和な世界を目指そうという思いが込められていることは、多くの生徒の心に残ったことでしょう。

5日目はゴスペルシンガーでいらっしゃる上原ヨシュア氏の賛美に耳を傾けました。とても素晴らしい歌声を聞かせていただき、非常に有意義なひとときとなりました。

また早天祈祷会では、大学・高等学部の方々が、それぞれの神戸女学院での生活を様々な角度からお話ししてくださり、放課後プログラムでも、様々な立場にいる方々の考えをお聞きすることができました。

(J宗教部　中学部　3年生)

KCCだより

［コーベ・カレッジ・コーポレーション（KCC）は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に “Japan Education Exchange” という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆してくださったのは、マーニー・ジョレンビー先生（Dr. Marnie Jorenby）です。先生は2005年に KCC-JEE の理事に就任、Website を担当してこられました。2011年５月、東日本大震災の影響で帰国した中高部英語教員に代わって急遽来日して、７月までＪ１の英語を担当してくださる傍ら、遠野でのボランティア活動にも参加されました。そして2012年４月から2014年３月まで再び中高部英語教員として神戸女学院中高部で教鞭を執られました。帰国後、KCC-JEE の理事としての活動を再開してくださっています。日本文学がご専門で、今回の記事も先生ご自身が日本語で書いてくださいました。

また、今回取り上げられている、第１回卒業生の渡邉 常（わたなべ つね）は、カールトン・カレッジを卒業して帰国後、長く神戸女学院の教師として数学や理科を教え、また同窓会の会長も務めました。］

大草原の小さな留学生

KCC-JEE　理事
マーニー・ジョレンビー

神戸英和女学校（神戸女学院の前身）の第１回卒業生の１人である渡邉常が、第３代校長エミリー・マリア・ブラウン女史（Miss Emily Maria Brown）の母校であるミネソタ州ノースフィールド市のカールトン・カレッジ（Carleton College）へ留学したのは1889年のことでした。1866年に同大学が設立されてからまだ20年そこそこのことで、常は初めての東洋人の学生でした。校舎といえば本館のウィリスホールと天文台ぐらいしかありませんでした。見渡せば草原ばかりで、海までは千キロ以上。山どころか、丘が一つしかなくて、「ザ・ヒル」と呼ばれていました。『大草原の小さな家』の舞台であるワルナット・グローブはそこから西に150キロのところにあり、ローラ・インガルズ・ワイルダーがそこで暮らしたのはたった10年前のこと、ノースフィールド市のあるライス・カウンティは無法の地でもあって、有名な盗賊、ジェシー・ジェームズがノースフィールドの銀行を襲うのに失敗したのはたった12年前のことでした。

文化と貿易が盛んで、海も山もある神戸から来た常にとっては、ミネソタの大草原は寂しく殺風景なところだったことでしょう。たくましい開拓者でも、木が一本もない草原で暮らそうとして発狂するケースはたくさんありました。おまけに、開拓者は出身国の仲間同士で小さなコミュニティを作って支えあうことができましたが、常はノースフィールドでたった１人の、ひょっとしたらミネソタ州でたった１人の日本人でした。もちろん授業は英語ばかりで、留学生のためのサポートサービスもありませんでした。それでも常が懸命に勉強して４年間で大学を卒業できたのはかなりの気骨があったからでしょう。

カールトンは私の母校でもあります。だから興味を持ってアーカイブで彼女についての調査をする事が出来ました。その時見つけたのが、1890年12月の大学新聞、『カルトニア（The Carletonia）』に常が投稿した「科学の影響」というエッセイ。そのエッセイの中で常が科学と神様について書いている文章は私の心に響きました。

> 科学は魂に力強く興味深い印象を与えます。「自然」という本は神様の啓示の最初の書物です。自然は、それだけでは結末を欠いた「始まり」のように未完成なものです。聖書によってその「始まり」が初めて完成されます。自然という本は我々に色々問いかけますが、そのページをめくっても何の答えも見つかりません。この世を去る時の素晴らしい結末とそれをどうすれば得られるかを知るために、聖書を読むように仕向けます。だからこそ私たちは科学を追求するのではありませんか。（中略）そうです、科学の勉強を通じて、神様が造られた物事と、造られた理由と、何故それが造られたかを理解することができます。そして、神様が考えたことを、私たちも考えるようになるのです。

自然を「本」に例えるなど、この文章は英語の影響が強く感じられます。エッセイを書いた時点でアメリカに留学して２年の常は、一生懸命に西洋科学の世界を生きようとし、科学と宗教と自然という難しい概念の関係を整理しようとしていたようです。

地球の裏側に行く留学生は昔も今も同じように新しい考え方に出会って、頭を再整理する必要があります。今のミネソタ州の大草原には木がたくさん植えられて文化も発展していますが、留学生が異文化の中で大きな刺激を受けることに変わりはありません。2010年８月には、ノースフィールド市でのインターンシップに派遣された神戸女学院の学生が私の家にもやって来ました。大草原に来るのに、持参した靴はハイヒール３足だけでしたので、私がスニーカーを買ってあげました。常のように広い大草原を歩いて、新しい一歩を踏み出してくれたらと思ったからです。

今の大草原は、常の時代よりずっと暮らしやすくなっています。常のように大学新聞で名前を「わたなば」と間違えられる可能性も少なくなっているでしょう。今は、留学が簡単にできる時代になったのに、日本からの留学生は減っているようです。とても残念なことだと思います。自然と宗教と異文化に対しての理解を深めるために、新しい靴に履き替えて、大草原に踏み出す必要があると思います。昔の学者は「自然」という「本」の答えを求めて、よく外国の地を踏みました。そうやって、常と同じように、他民族の科学と文化の交差するところまで来て、生涯を変えるような大発見をしたのです。

常は前出のエッセイの別の箇所で、「科学に目覚めていない人は石ころを見ればただの塊にしか見えないけれど、科学者が同じ石を見れば昔の記録が見えるでしょうし、石がどうやって造られたかも考えるでしょう」と書いています。

実は、昨日森を歩いていて、石ころにつまづきました。その石ころをよく見たら、「あっ！」と感嘆の声が出てしまいました。ごく稀に見つかるデボン紀のオウムガイ目の化石でした。巨大なオウムガイの胴体が25センチも残っていて、見事なものでした。昔、初めてそういう化石を見つけて父に見せた時に、父は「あれは開拓者の缶詰が化石化したものだろう、ほら、缶の凸凹まで見えるぞ」と言いました。父は「科学に目覚めていない人」だったのかもしれません。父には色々固定観念があって再整理は無理かもしれませんが、若い女性には石の来歴にも、外地を歩く可能性にも目覚めてほしいです。これからはKCC-JEEを通じて、神戸女学院の学生たちのためにそういう機会を提供していきたいと願っています。

カールトン・カレッジの天文台の前に立つ渡邉 常
（天文台の写真に私が常の絵を描きました）

デボン紀のオウムガイ目の動物

インターンシップの学生が持参した
ハイヒールと私が買い与えたスニーカー

退職のことば

個人情報保護のため、一部削除しています。

人　事

慶　弔

個人情報保護のため、一部削除しています。

栄　誉

永年在職者表彰

記念賞

個人情報保護のため、
一部削除しています。

その他の新刊一覧

石川康宏（総合文化学科教授）　他著
『『古典教室』全３巻を語る』　（新日本出版社）
景山佳代子（総合文化学科専任講師）　他著
『現代社会を学ぶ
—社会の再想像＝再創造のために—』
（ミネルヴァ書房）
金田知子（総合文化学科教授）　他著
『アフリカ・ドラッグ考
—交錯する生産・取引・乱用・文化・統制—』
（晃洋書房）
吾妻壮（心理・行動科学科教授）　他訳
『関係するこころ
—外傷、癒し、成長の交わるところ』
（誠信書房）
髙村峰生（英文学科専任講師）　他著
『文学理論をひらく』　（北樹出版）

新刊紹介

石川康宏（総合文化学科教授）著

『「おこぼれ経済」という神話』

新日本出版社　2014年６月刊
156頁　1,100円＋税

2014年４月から消費税が５％から８％に引き上げられた。本書には、増税直後の４月５日に安部晋三首相が日本橋「三越」本店で買い物（約４万円と消費税約３千円）をして、「消費税が高くなったと実感した」と語ったエピソードが取り上げられている（本書97～98頁）。そこでは、老舗デパートで書籍や靴などに「散財」した安倍首相の「わざとらしいパフォーマンス」と「庶民感覚の欠落」が批判されているが、本書に一貫して流れる立場と記述スタイルを代表する箇所である。

６頁ほどのプロローグで本書の全体の概要が分かりやすい、丁寧な文章で説明されている。プロローグに続いて「戦後日本の経済成長」、「失われた二十数年の実態」「財界・大企業が求める経済政策」では戦後の日本経済の歩みが丹念に、かつ批判的に綴られる。そして、「アベノミクスがやっていること」と「自民党が描く近未来の日本社会」では現在の安倍政権の経済政策が批判的に再検討される。「エピローグ　新しい経済政策」において石川先生の提案が12頁ほどの中に非常に整理された形で示される。本書のタイトルの一部になっているが、大企業が利益を上げれば国民も豊かになるという「おこぼれ神話」は日本の高度経済成長期の昔話であり、バブル崩壊後の1990年代からは通用しなくなっている幻想である。そのような神話や幻想に寄りかかっているアベノミクス（金融緩和策・財政政策・成長戦略）に対して、石川先生は各種の経済統計（30余りの図表）を駆使しながら経済学的立場から痛烈に批判している。

国民の賃金が上がり国内消費が拡大すれば日本経済も成長するという立場から、「新しい経済政策」が提案されており、庶民感覚に寄り添う、弱者に優しい政策が示されている。専門外の読者にも理解できるように配慮された文章や図表であり、石川先生の教育・研究の手腕が遺憾なく発揮されている貴重な本である。

（総合文化学科教授　小松 秀雄）

新刊紹介

神戸女学院大学文学部総合文化学科　監修
河西秀哉　編

『日常を拓く知２　＜恋する＞』

世界思想社　2014年４月刊
192頁　1,944円（税込）

＜恋する＞を知るために

総合文化学科のシリーズ「日常を拓く知」の第二弾として『恋する』が今春刊行された。今回の編集は河西秀哉先生である。本書では個人的で密やかなものと思われがちな「恋」という体験が様々な形で思考されているが、その方法に執筆者の人となりが現れているようで興味深い。

第一部は三つの対談から構成されている。いわゆる「草食系男子」など現代の恋愛事情についてのもの、スタンダールの『恋愛論』を土台として文学と神学の立場から「情熱恋愛」を語ったもの、それに、人気漫画『ハチミツとクローバー』に現れる男女の人間関係を哲学と経済の視点から読み解いたもの。いずれの対談においても先生方の専門的知識が柔軟な形で生かされているのが印象的である。学生からの本質をついた質問も挟まれている。

第二部では、六人の研究者が様々な学問領域（哲学、歴史学、経済学、ヨーロッパ文学、神学、アメリカ文学）から、「恋する」ことについて論じている。とはいえ、日常的な経験から乖離した堅苦しさはここには一切ない。たとえば、「恋は体験するもので、それについて論じることにいったい意味があるのでしょうか」といった素朴な疑問が真っ向から問われたり、森高千里と槇原敬之のラブソングに見られるジェンダー規範のゆらぎが考察されたりする。恋愛とお金のような身もふたもない話も展開される。そうかと思えば、ドイツのゲーテやフランスのジイド、アメリカのミレイといった作家や詩人たちの恋愛観の一端に触れることもできる。第三部では古今東西の恋愛についての書物が紹介されているので、第一部、第二部で好奇心を掻き立てられた読者は次の書物へと向かうことができる。「恋する」ことと「知る」ことを心のうちで結婚させるための一冊である。

（英文学科専任講師　高村 峰生）

新刊紹介

神戸女学院大学文学部総合文化学科　監修
建石始　編

『日常を拓く知３　＜伝える＞』

世界思想社　2014年８月刊
186頁　1,944円（税込）

読んだ後で、誰かに話がしたくなる。誰かに読んでもらいたくなる。地域や時代、価値観の違いを超えて「『伝える』とは何か」をやさしいことばで綴る本書は、まさにそういう本だった。

ページをめくると、先生たちのやりとりの声が聞こえてくる。耳を傾けるうち、引き込まれていく。その後で「さっきの話だけど、実はね…」と一人ずつ詳しい話をしてくださる。そして、「もっと知りたいならこれをどうぞ」と更なる学びへ導かれていく。そんな気分になる。

総合文化学科ならではの多様なまなざしは、本テーマのもつ広がりと奥行きを伝えてくれる。例えば、私たちは普段、単一のことばを使っていると思い込んでいるかもしれない。しかし、国内外の地域に目を向けると、ことばの多様性に気づく。それらのことばはアイデンティティと結びつくが、状況に応じてことばが使い分けられ、葛藤を生むこともある。ことばは想いを伝え、人と人をつなげて社会の形成を促すものであるがゆえに、特定のことばを推奨・抑圧することで支配の道具にもなりえる。

社会的な生き物である私たち人間は、一人では生きることができず、太古から想いを伝え合ってきた。ことばや身体はもちろん、時に物を通じ、時に誰かに想いを託して。また、私たち人間は生きるために伝えるだけでなく、伝えるために生きることもある。強い想いを誰かに託し、次の世代に届けたいと願うこともあろう。

本書『伝える』には、総合文化学科ならではの多様なまなざしと、著者の先生方の伝えたいことば、未来にも届けたい力強い想いがある。そんな著者たちの想いを手に取ってみませんか。

（心理・行動科学科専任講師　木村 昌紀）

＜留学報告＞

Diversity *and Inclusion*

Yolanda Alfaro TSUDA

「実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。また、もし耳が、わたしは目ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない。もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか。」（コリント12:12～17）

これは、私のお気に入りの聖書の一節です。なぜならば、この聖句が色々な国や文化で生活してきた私の支えになってくれたからです。教えてくれているのは、私たちひとりひとりのすべてが、役割を持っている、私たちのすべては、この世界で重要である、ということではないでしょうか。

2013年８月から2014年９月まで、私は海外留学をしておりました。当初の計画は、これまで14年間継続して所属してきたハーバード大学のライシャワー研究所で一年間を過ごすということでした。

米国に戻っての目的は、向こうに移住したアジアの人々に関する移民政策と、日本に移住している近隣アジア諸国からの人々に関する移民政策との比較研究でした。もう一つの目的は、東海岸のいくつかの名門女子大学における、若い女性のためのリーダーシッププログラムの視察でした。

ハーバード大学では、研究を行うだけではなく、ライシャワー研究所内の様々な学者、研究者や企業、国際機関とのネットワーキングもして参りました。あの2014年のノーベル平和賞の受賞者の一人である若いパキスタン女性の Malala さんとも、そこで出会う機会がありました。昨年の感謝祭は、あるアミッシュの家族たちと一緒に過ごすことが出来ました。

最も忘れられない経験の一つは、名門女子大学の Smith College の新学長就任式に出席が出来たことでした。彼女は「より多くの女性が世界でリーダーになるため、“Diversity ***and Inclusion***” つまり、「多様性」と［包容、包み入れること］が必要だ」と述べました。就任式には、他の女子大学の学長も多数が出席しておりまして、その一人は、ハーバード大学の初めての女性学長となった方でした。スミスカレッジのようないくつかの女子大学を訪問しましたが、どこも充実したリーダーシッププログラムのあることに大変驚きました。その成功の秘訣は何かと尋ねましたら、Wellesley College の大学教授の返事は、「シンプルですよ。私たちの大学では、強いダイバーシティ＆インクルージョンポリシーを持っていますから」と答えてくれました。「すべての学生に、新しいアイデアの受容を促す、そのために専門家、教員、卒業生、コミュニティのメンバーなどから構成されるサポートチームを置く。この「ダイバーシティ＆インクルージョン」の言葉を、何度もいろいろな大学関係者だけではなくビジネスウーマンなど各界の女性リーダー自身からも聞かされました。

さて、2013年11月８日に “SuperTyphoon” と呼ばれることとなった超大型台風がフィリピンのタクロバン市を襲いました。そこは、私の生まれ故郷でもありました。神戸女学院の基本理念の一つ「愛神愛隣」に励まされて、私はボストンを離れる決心をしました。日本科学技術機構から緊急研究助成金をいただいて、他国の科学者や研究者と共に、被災地に入りました。私たちは、被災地の復興のための調査研究と支援を始めました。

ハーバード大学のような非常に快適な場所を好んで離れる人はあまりいないと思います。しかし、私が選んだのは、38度の暑さ、90％にもなる湿度、頻発する停電、インターネット接続も不安定、劣悪な衛生状態、ごみの山。そういった瓦礫の街に行くことでした。

被災地には、世界中から、色々なボランティア、外国政府、国際機関や国際 NGO などが集まって、被災で苦しんでいた人たちを支援していました。そういった中で「Diversity ***and Inclusion***」の本当の意味を学んで参りました。

今日の、国際化とかグローバル化とか言われている日本には、現実に Diversity［多様性］が存在しています。しかし、そこでは ***Inclusion***［包容、包み入れること］という言葉はまだ市民権を確立していません。例えば、この国の人口の２％が外国人であるという事実があるにも関わらず、仲間として受け入れるのではなく、むしろ、外国人は社会問題として扱われています。この考え方は、外国人宣教師が創立しており、基本理念の一つに「国際理解」が掲げられている本学にも、まだ残っています。本学には、既に世界の４大陸から来ている外国人の先生がいるにも関わらず、その人たちが本当に仲間として、扱われているか考えたことありますでしょうか。

Diversity ***and Inclusion***. このふたつのキーワードはこの大学、この国、この世界で、同時に使わなければなりません。Diversity without inclusion is the same as discrimination.

（英文学科教授）

史料室の窓(35)

クラークソン先生

― リベラルアーツ教育の種をまいた人 ―

神戸女学院史料室

神戸女学院のキャンパスが重要文化財に指定されました。ヴォーリズ博士（Dr. William Merrell Vories）が設計したキャンパス全体がその対象です。これは校舎という建造物としてではなく、神戸女学院という教育機関そのものが指定を受けたといってもいいほど大きな出来事です。

神戸女学院はリベラルアーツ教育を教育理念として掲げ、その教育を行なう場として岡田山キャンパスを作り、81年前に神戸から西宮に移転してきました。ヴォーリズ氏は学校側の要望を聞き、要求以上のキャンパスを作り上げたといえるでしょう。完成当時「東洋一美しい」とうたわれた校舎群は、確かにすばらしいものです。けれどもこのキャンパスを輝かせているのは、その背後にある教育理念です。ヴォーリズの設計だから美しいのではなく、神戸女学院のキャンパスだから美しい。そしてこの80年間、これをずっと維持してきた学校であることが美しい。「神のなさることは時に適って美しい。」（コヘレトの言葉３章11節 a）―学院の教育の業と営みが善とされたことにほかなりません。

さて、今年７月、中高部に一つの新しい校舎が誕生しました。「ヴァージニア・クラークソン記念館」―神戸女学院第２代校長の名前をいただいています。この先生の名前はこれまでほとんど耳にすることがありませんでした。在任期間が短かったということもあり、その功績が長らく注目されてきませんでした。しかし、第５代院長・デフォレスト先生（Miss Charlotte Burgis DeForest）は、神戸女学院創立50周年を記念して書いた小歴史の中で、この先生の功績を次のように紹介しています。「二代目の校長ミス、クラークソンは事を組織的にするのが得意の方でありました。」と。

クラークソン先生（Miss Virginia Alzade Clarkson）は、それまで小学校程度であった学校のカリキュラムを整えて、５年制の中学校レベルの教育機関として確立させた方でした。本部へあてた手紙の中で「生徒たちをキリスト教主義学校〔にふさわしい〕卒業生として送り出すためには、５年という期間は少しも長すぎるとは思われませんでした。実践的見地から言えば、私は８年と言いたいほどでございます。〔略〕当地の女性は非常に若いうちに結婚いたしますので、学校にとどめておくことはいささかむずかしいことでございます。〔略〕私は５年〔の課程〕を少なくとも試してみるのが賢明なやり方であろうと思っております。〔略〕生徒たちが余りにも単純に、免状が何より大事であると考えがちなものですから、４年制に定めることには不安がございました。」（1880年３月５日附）と５年制女学校の意義を報告しています。そしてこのあと、「最終学年を研究科のようなものにすべきかもしれません。〔略〕教科の学習のためにも当校の最終学年は最も大切であると思いますので。」と言っています。「研究科のようなもの」―のちに高等科、カレッジ課程として実を結び、神戸女学院 Kobe College の誕生となる萌芽をここに見つけることができます。

Miss Virginia Alzade Clarkson (Mrs. Cady), 1851-1940.

クラークソン先生は神戸女学院を教育機関とし、のちの高等教育機関へとつながる道筋を描き出した先生でした。３代目、４代目の院長がこの道を継承し、今日の神戸女学院があります。

ヴァージニア・クラークソン記念館は、中高部の本館・葆光館の陰に隠れるような位置にひっそりと建っていて、いわゆるメインストリートからその姿を見ることはできません。けれども、教育を支える大切な建物であることは、先生がひっそりと、しかし確かに残された足跡と同様、忘れられるものではありません。先生の蒔いた一粒のリベラルアーツ教育の種は、重要文化財として、確かに花開いています。

＜オフィスの宝物＞

保健室の宝物

第一体育館にある保健室は、事務室と処置室・休養室に分かれており、健康相談などプライバシーも保ち易くなっています。

過去５年間の平均年間利用者数は、延3200人です。（学生・教職員他含む）

関わった中で特に印象深いのは、難病を抱え、病気に対する不安や恐怖などを持ちながらも明るく気丈に振舞っていたある学生さんです。何度となく体調を崩し、入院を余儀なくされた時も弱音を吐かず現実を受け入れ、人知れず努力を重ね無事卒業されました。４年間彼女に寄り添いサポートする中で、病気と闘うよりも病気を受け入れて共に生きるという姿勢など、様々なことを私自身学びました。また、今まで関わったすべての学生さんとの出会いの時間それぞれが大切な思い出であり、大きな宝物です。

そして、もう一つの宝物は、保健室のスタッフです。シフト制のため全員が揃うのは、唯一４月の学年始定期健康診断時だけですが、この日のために全員で綿密な準備をし、チームワークで２日間を乗り切っています。また、日々のスムーズなコミュニケーションは言うまでもなく、自発的に各々の強みを業務に生かし、緊急時の対応も協力し合うことによって力強く保健室を支えて貰っています。

今後、保健室としての機能を今以上充実させ、より身近に保健室を利用していただけるよう努力していきたいと思っています。

（保健室）

処置室

オフィスの宝物

FD センターの FD とは Faculty Development（教員の能力開発）の略で、本学の教育活動の質を向上させるための活動をしています。ここでの「教育活動の質」とは、授業を担う大学教員が求めるものと学び手である学生が求めるものとのすき間を埋め、よりよい教育環境を提供することだと考えています。

FD センターの宝物は二つあります。一つめは教員や学生から集められたデータです。年２回行われる授業評価アンケートは、原則として開講している全ての科目・クラスで実施しており、学生のたくさんの「生の声」が得られます。また、教員活動評価では、毎年本学の専任教員の教育・研究・社会活動の内容を「教育・研究業績報告集」にまとめています。この内容は教員本人の申告によるもので、自己評価活動の一端になっています。それから、春と秋に教授会研修会を開催しています。2014年度秋の教授会研修会では、「リベラルアーツ教育の現代的意義と将来性」をテーマにこれからの神戸女学院大学の道標を確認し、今後の展望が話し合われました。記録されたこの内容は、今後の大学運営の礎になると考えています。二つめは、チームワークです。毎日たくさんのデータを集約するため業務が煩雑になってしまいがちなのですが、お互いにフォローし合える同僚がいるため、スムーズに作業ができます。

これからも教職員と学生の満足度向上に貢献できるよう努力してまいります。

（FD センター）

倉庫内資料

大学報告

子どものための七夕コンサート
（子どものためのコンサート・シリーズ第39回）

「子どものための七夕コンサート～音楽で恋の魔法をかけよう」（子どものためのコンサート・シリーズ第39回）を７月５日（土）に講堂で開催しました（11時と15時の２回公演、来場者計631名）。

出演は、「音楽によるアウトリーチ」履修生を中心とする音楽学部生13名（ピアノ４、声楽２、フルート４、パイプ・オルガン、打楽器、お話）で、七夕の物語にちなんで、恋にまつわる音楽を中心にプログラムを組みました。開幕はアルディーティ作曲〈口づけ〉、２台ピアノでエルガーの〈愛の挨拶〉、プッチーニのオペラ《ジャンニ・スキッキ》より〈私の大好きなお父さん〉を独唱で、ロイド・ウェバー〈ピエ・イエズ〉を二重唱で、メンデルスゾーンの〈結婚行進曲〉をオルガンとフルートとパーカッションでといった形で進めました。これに、フルート四本のアンサンブルによるライヒャの《シンフォニコ》ニ長調の第一楽章と、ピアノ独奏や２台のピアノの演奏が加わりました。

途中、〈ドレミのうた〉で会場の子どもたちとアクティビティを行ない、音の階段をプラカードで示して、階段を順番に上がったり下がったり、ジャンプで進んだりして一緒に楽しみました。〈きらきら星〉と〈たなばたさま〉も皆で一緒に歌いました。

終演後には恒例の楽器体験コーナー（ピアノ、パイプ・オルガン、フルート、トーンチャイム、ウィンドチャイム）に行列ができて、子どもたちで賑わいました。

（音楽学部アウトリーチ・センター長　津上 智実）

〈ドレミの歌〉で聴衆参加

心理相談室公開講演
『子どものネガティブ行動に対処する』

心理相談室（心相）は大学院附属の実習機関であり、臨床心理士を目指す人間科学研究科の大学院生が“有料”で外部の方々の心理相談を担当している。毎夏実施される“心相ウィーク”（今年で８年目）は、院生と臨床心理の教員が中心となり、地域支援活動の一環として「無料相談」と「公開講演」を行っている。本学心相では特に「子育て支援」に力を入れており、昨年、筆者は須藤講師とともに西日本で初めて PCIT（親子相互交流療法：子どもの問題行動改善に有効な新しい心理療法）を導入した。そこで今回は PCIT のエッセンスを広く伝えるとともに、子育てで多くの保護者が困難と感じやすい「子どもの問題行動への対処」について具体例を挙げ、親として注意すべき対応ポイントを臨床心理学（アタッチメントの再構築と行動療法による介入）の観点から解説した。要点としては、まず親子のコミュニケーションパターンに気づき、親の対応を適切に変化させ親子の信頼感を再構築すること、その上で、親の対応や状況の何が子の問題行動を促進する要因になっているか見極め、悪循環を止めるための介入をするという２段階の対応が重要で、それに役立つ PCIT の技法について提示した。当日は70名の方が聴講され、子育てに悩む親御さんからの無料相談申し込みが倍増するなど非常に盛況であった。（なお、PCIT は2013年度本学研究所総合助成により実施されました。この場を借りて感謝致します。）

（心理・行動科学科教授　國吉 知子）

第８回心理相談室ウィーク公開講演会
「子どものネガティブ行動に対処する」講演の様子

特別講演

「特権と抑圧は表裏一体」

2014年９月30日（火）11：00～12：30、ジュリア・ダッドレー記念館大会議室にて「特権と抑圧は表裏一体 Privilege and Oppression: Two Sides of the Same Coin」と題した講演会が開かれました。講演者ダイアン・グッドマン先生 Dr. Diane Goodman は米国の多文化共生コンサルタント＆ダイバーシティトレーナー。大学院通訳・翻訳コースでは数年前から、上智大・出口真紀子先生（元英文学科准教授）との連携で、翻訳 OJT として大学院生を中心に先生の著書 *Promoting Diversity and Social Justice: Educating People from Privileged Groups*（2nd ed.）（Routledge, 2011）を翻訳しています（2016年刊行予定）。

講演では人種、ジェンダー、性志向、階級などでの優位集団と被抑圧集団のうち、特に優位集団の側の教育に焦点を絞った理論的、実践的アプローチを解説していただきました。こんな質問を書いた紙が配られました。「あなたは、深刻な財政的困難に直面したことがありません」「あなたは、警察に呼び止められると心配したことはありません」「あなたは、国や地方の選挙に投票できます」「あなたは、自分で選んだ人と恋愛できます」これらの質問に○と答えられるのは、特権をもっているから……こんな対話で講演が進められました。英語での講演でしたが70名ほどの出席があり、フロアからの発言も活発に行われ、学生たちは「自分の特権に初めて気づいた」などと感想を述べてくれました。

抑圧があまり意識されていない日本でも、今後、重要性が増すと予想されるトピック。これを機会に社会的公正やダイバーシティについて考えていただければ幸いです。

（英文学科教授　田辺 希久子）

ESD プログラム報告会

７月４日に、学内のみならず一般にも公開された形で大学院 ESD プログラムの報告会「Learning to be a Woman Leader for ESD」が行われました。留学生たちは2013年10月の来日以降、ESD プログラムのカリキュラムで学び理解したことについて各々の専門分野に関連づけながら、わかりやすく丁寧に報告を行いました。また９月４日には、「ESD Program Final Presentation Meeting 2014」と題した学内学外の関係者向けの修了報告会を実施しました。各人の専門分野にもとづいて本プログラムから学び得たこと、残された課題や帰国後の展望についての報告ならびにディスカッションを行いました。

中国、インドネシア、フィリピン、ベトナムの４ヶ国から５名の留学生を迎えてはじまった第４期 ESD プログラムですが、留学生たちは１年間にわたる本学でのカリキュラムを終え、９月16日にソールチャペルにて無事に修了式を執り行うことができました。

現在、ESD プログラムは終了しておりますが、助成開始から足掛け５年半のプログラム運営中におきましては、学内外の先生方、その他多くのご関係のみなさまに大変ご尽力いただきました。改めまして、感謝申し上げます。

（武中 桂）

留学生

企業訪問
～学生のよりよい就職のために～

キャリアセンターでは毎年、職員が企業を訪問し、採用担当者と情報交換を行っています。この取り組みは特に2011年度から強化しており、今年度も昨年度に引き続き、前年を上回る数の企業を訪問する予定です。現在も学生対応や学内での講座の傍ら、日々訪問活動を行っています。訪問対象としては、今年度学生が内定を得た企業を中心に、過去に採用実績がある企業や、ぜひ今後つながりをもちたい企業などです。

訪問を行う中で特に今年感じることが、昨年度までとは企業側の動きや対応が大きく異なるということです。具体的には、企業側の人材ニーズがここ数年で最も高まっているという事実です。特に女子学生の採用に対する意欲の高まりを感じています。その現れとして、訪問時に求人票をいただくだけではなく、本学内で企業説明会を行いたいという依頼が多くなっています。また、ピンポイントで人材ニーズ（希望配属地や職種など）をいただき、それにマッチした学生を紹介し、実際に就職につながった事例が多いことも今年の特徴です。いわゆる「マッチング」の強化につながっています。

このような企業側の声やニーズは、実際に訪問することで初めて把握することができます。今年は企業側の来訪件数も増えておりますが、今後も待ちの姿勢ではなく、引き続きこちらから訪問することに力を入れ、学生のよりよい就職につなげていきたいと考えています。

（キャリアセンター職員）

地域創りリーダー養成プログラム発表会

2014年８月２日、エミリー・ブラウン館において、地域創りリーダー養成プログラム発表会が「４年生26人が語る！私が一番輝く瞬間☆」と題して行われた。

このプログラムは、学科を越えて集まった学生たちが２年次に地域活性化を学び、３年次にイベントを企画・実施し、４年次にプレゼンテーションを学び、自分たちの活動内容を発表するというものである。なお、オープンキャンパスの企画として高校生向けに発表するという形式は今年で３年目であり、今回の参加者は40名ほど、高校生やその保護者のほか、発表者の保護者の方も来られたようである。

発表内容は、一つ目は環境班というグループで水と土に関する実験を交えた２回のイベントについて、２つ目は農地班というグループで地産地消をテーマに収穫やゲームなどを行った２回のイベントについて、３つ目は交流班というグループで門戸厄神や神戸女学院を散策する２回のイベントについてであった。

イベントとプレゼンとではそれぞれ使うエネルギーも気持ちも異なる。学生たちは様々な思いが交錯する中で自らを肯定し、あるいは否定し、そして変革していく体験の連続であったろうが、発表会はその２年間の思いが結晶となってまるで蝶のように一気に光り放たれた瞬間であったように思う。心から労いの言葉を送りたい。そして、イベントにご参加いただいた方々、このプログラムに関わったすべての教職員の方々には、心より感謝申し上げる次第である。

（心理・行動科学科准教授　鶴田 英也）

子どものためのスペシャル・コンサート
（子どものためのコンサート・シリーズ第40回）

「子どものためのスペシャル・コンサート～トロンボーンの魅力」（子どものためのコンサート・シリーズ第40回）を10月13日（土）に講堂で開催しました（11時と15時の２回公演、来場者計311名）。

出演は音楽学部の卒業生を中心とする「ベルカント・トロンボーン Bell Canto Trombone（歌うトロンボーン５人組）」とピアノとお話の７人です。

オープニングは吉田梨絵作曲〈ベルカント・ファンファーレ〉で、あちこちから奏者が登場して掛け合った後、舞台に５人が勢揃いしました。バッハ《マタイ受難曲》のコラールやハイドンのオラトリオ《天地創造》の一節を演奏して、「神様の楽器」と呼ばれて来た歴史を実感してもらったり、吉田梨絵編曲〈秋の歌メドレー〉とジャズの〈サムバディ・ストール・マイ・ギャル〉を三重奏で、プッチーニ〈誰も寝てはならぬ〉を二重奏で、サン＝サーンス〈カヴァティーナ〉を独奏で、と様々な編成で聞いてもらったりしました。カラフルなプラスチック製のピーボーンを紹介して〈おもちゃのチャチャチャ〉を演奏し、最後はアグレルの〈ゴスペルタイム〉で締め括りました。

終演後には楽器体験コーナー（ピーボーン、ピアノ、中型と大型のパイプ・オルガン、フルート）にスライドホイッスルを作る工作コーナーを加えたところ、大変好評でした。

（音楽学部アウトリーチ・センター長　津上 智実）

第５回絵本翻訳コンクール

高校生に英語を学ぶ楽しさと、異文化を知る喜びを味わってもらいたいとの意図でスタートした絵本翻訳コンクールも第５回を数え、全国から1689作品もの応募をいただけるまでになりました。

今年度の課題図書は、“Catch That Crocodile!”インドの街中に突然現れたワニと、周りの人々をコミカルに描いたお話です。原書のリズム感を幼い子どもたちにも伝わるような日本語で表現できるかが評価のポイントとなりました。

審査員長の松岡享子氏（公益財団法人東京子ども図書館理事長）と田辺希久子文学部英文学科教授、豊倉省子非常勤講師による審査では、どの作品にも様々な工夫や努力の跡がみられ、選択に迷うほどの出来栄えの中、優秀賞に県立芦屋国際中等教育学校と洗足学園高校（神奈川県）、佳作に北海道札幌旭丘高校、都立小山台高校、神戸女学院高等学部の各チームおよび個人を受賞者として選出しました。

10月25日（土）、本学 KCC ルームにて表彰式をおこない、優秀賞受賞の２組には、翻訳した作品を製本した「世界に一冊だけの私の絵本」を授与し、朗読していただきました。その後の懇親会では、受賞者がお互いの作品の内容について語り合うなど、終始和やかな雰囲気が見られました。

このコンクールを通じ「神戸女学院大学の英語教育」の認知度が着実に向上していることを感じます。各高校の先生方をはじめ、学内外のお支えくださった方々に心からの感謝を申し上げます。

（入学センター・広報室職員）

出演の「ベル・カント・トロンボーン」

受賞者と審査員、本学教員による記念撮影

＜留学生紹介＞

Welcome to Kobe College

2014年度には新たに７名の留学生の方々を本学に迎えました。前期４月から７月には、韓国・徳成女子大学より２名が来学されました。後期からは、同大学より２名、米国・ボーリンググリーン大学より１名の計３名が総合文化学科に所属、英国・イーストアングリア大学からは、１名が英文学科に所属し、日本語の講義に加え、それぞれの専攻に応じ、社会学、言語、Global Studies や留学生を対象として英語で日本文化を学ぶ Introduction to Japanese Culture と日本の現代事情を学ぶ Current Issues in Japan の２科目（ともに本学学生も受講可能）などを受講しています。

また、中国・広東外語外貿大学院からの留学生は、本学大学院文学研究科で修士論文の完成を目指して学んでいます。

留学生の方々は、本学学生が留学生をサポートする“留学生バディ”制度を通じ、交流を深めています。

皆様にも、留学生たちの本学での生活・勉強がより充実したものとなるよう、様々な場面でご協力いただければ幸いです。

（学生生活支援センター・国際交流センター）

＜受入れ留学生報告＞

神戸女学院での留学

徳成女子大学交換留学生

桜が美しい神戸女学院大学のキャンパスを歩いたのが昨日のことのようです。来日前は友達ができるか、授業は難しくないか、日本の生活に早く慣れるか等の心配がありましたが、そんな心配は不要だったとすぐに分かりました。

寮や授業、パーティーを通してできた友達がいつも力になってくれ、美味しいレストランや観光地へ連れて行ってくれたり、日本と韓国の文化の違いや共通点を話したり、楽しい時間を過ごすことができました。留学生活を通して考え方やライフスタイル等の相違点を実際に体験できたことは、今後の日本語の勉強にも役立つと思います。

日本語の授業は難しいものもありましたが、授業の始めから終わりまで日本語に触れることで総合的に日本語能力を向上できました。滞在中は韓国語字幕なしで日本のテレビ番組や映画を見たり、ユニバーサルスタジオジャパンに行ったり、着物で嵐山を観光したり、初めての経験をたくさんしました。この留学生活は、私の人生で忘れられない思い出です。

中学生の頃からの夢である、大学生になったら交換留学に行くという夢が叶った今、以前より自信を持つことができました。将来何をするかまだわかりませんが、残りの大学生活では日本語の勉強を続けながら、もっと色々な経験や挑戦をしたいと思います。今回の交換留学は、言葉では表現できないほど素晴らしいものでした。貴重な経験をさせていただいて本当に感謝しています。

留学生活を振り返って

徳成女子大学交換留学生

神戸女学院大学に来て、皆さんの前で日本語で挨拶した日のことを覚えています。あっという間の四ヶ月でしたが、今までにない様々な経験をすることができました。

六月にはバディと一緒に法被を着て、えびす神社のびわ祭りに参加しました。急速に変化する社会の中で、歴史や伝統が守られていることがとても印象的でした。七月には学校で七夕祭りをして、みんなで集まって短冊に願いを書いて飾ったり、日本文化を体験することができてすごく楽しかったです。他にもバディと一緒に料理を作ったり、寮の友達とユニバーサルスタジオジャパンや高台寺、金閣寺など色々な所へ行きました。その一つ一つが、私にとっては忘れられない思い出です。

留学生活を通して日本語で話すことにも慣れ、パソコンで日本語を打つのもずいぶん早くなりました。様々なことがあった留学生活ですが、神戸女学院大学でのみなさんとの出会いが一番大切な出来事です。学校のことを教えてくれたり、遊びに連れて行ってくれたバディや友達、留学生活をサポートしてくださった国際交流センターの皆さん、いつも笑顔で接してくださった寮の先生方、勉強だけでなく私の悩みや日常生活にも気を配ってくださった先生。新しい生活に不安でいっぱいだった私は、みなさんのおかげで素晴らしい四ヶ月を過ごすことができました。日本で学んだことを無駄にしないように、これから一生懸命頑張りたいと思います。

＜派遣留学報告＞
ワイオミング州立大学

しっかり伝わる英語力

英文学科　4年生

私は米国のワイオミング州立大学に1学年9ヶ月、派遣留学しました。語学研修で単に英語を身につけるのではなく、アメリカの学生と一緒に英語で生活しながら同じ教室で勉強し、文化や語り口、現地での「あたりまえ」を学びながら英語力を深めたかったので、長期の派遣留学を選びました。

私が大学で最も力を入れてきたことの一つは、明確に伝えるスキルを磨くこと。伝える手段はプレゼン、ディスカッション、普段の会話、論文など色々ありますが、特にプレゼンでは伝えたいことを整理し工夫を凝らして伝え、また会場の反応を見ながら進める力が試されるので、面白いと思い一層力を入れてきました。

そこでアメリカでもパブリック・スピーキングの授業を取ることに。神戸女学院大学でも一年勉強していましたが、内容がもっと専門的になり、明確な目的を持って数々のプレゼン形式を実践。クラスメートの発表からも新しい発見がたくさんありました。また、本学で習得した効果的な歩き方や明瞭な発音などがアメリカで高く評価されたことは大きな自信につながりました。

授業以外ではワイオミング州立ラジオ局でインターンシップを経験し、主に取材を担当。クリミア危機でウクライナの専門家を取材することも。ここでは準備力と聞く力が試されました。また3月にイランの一大イベント、ペルシャ新年パーティの司会に抜擢され、イラン系アメリカ人と一緒に共同司会を果たし、成長を実感しました。

アメリカで迎えた21歳のお誕生日

広東外語外貿大学

派遣留学を終えて。

総合文化学科　4年生

私は去年の8月から今年の7月まで一年間派遣留学として中国の広東外語外貿大学に行ってきました。派遣留学に行きたいと思うようになったきっかけは一ヶ月の語学研修に参加したことがきっかけでした。当時は片言でしか中国語は話せなかった為、語学研修終了後中国語の勉強を基礎から始め、派遣留学に向けて勉強を始めました。派遣留学参加には、中国語検定3級以上、HSK 4級以上取得が条件で、私は派遣留学申し込み前にHSK 4級を取得することできたのでさっそく申し込みをし、派遣留学が決まりました。出発まで不安は少しありましたが、中国での生活が始まると、毎日が新鮮で不安もいつの間にかなくなっていました。ビザ申請、寮の手続きなども全て自分でする為、毎日が勉強で自分でなんでも行動し、解決したということは一つ私自身の成長に繋がったと感じています。広東外語外貿大学にはたくさんの留学生がいて様々な国の方々が中国語を勉強しています。週末や放課後などは留学生たちと一緒に遊んだりしました。遊ぶ時の会話は中国語なので友人と遊んだりすることで勉強になりました。広州は中国の中でも都会化していますが、まだ不便なところはまだたくさんあり、その中で生活するということは語学力向上だけでなく、自分自身の成長に繋がったと感じています。派遣留学に行きたくさんの経験もでき、私にとって良い経験になりました。

留学修了証です

＜語学研修報告＞

ヨーク大学

コミュニケーションへの挑戦

英文学科　3年生

今年8月、カナダのヨーク大学の語学研修に参加しました。26日間という短い期間でしたが、日本とは異なる文化に触れる中で、コミュニケーション力を伸ばす機会をもつことができました。

ヨーク大学にあるYUELIという語学学校に通いました。クラスには、トルコやチリ、台湾、韓国などの学生がいて、国際的な雰囲気にとても緊張しました。自分の英語が通じるかどうか常に不安があり、授業中に自分から発言したり、休憩時間にクラスメイトに話しかけたりすることができませんでした。しかし、英語で積極的にコミュニケーションをとるように努力しました。実際、先生や学生はとても親身に聞いてくれました。うまく表現できず四苦八苦している時にも、私が手ぶり身振りでなんとか伝えようとすると、向き合ってくれたのでとても嬉しかったです。週末には、ナイアガラの滝でボートに乗ったり、野球観戦をしたりしました。その移動中、学生と話をして交流を深めることができ、自分の英語力を伸ばす良い機会にもなりました。また放課後には、クラスメイトとダウンタウンに食事に行き、お互いの国の文化、例えば宗教の違いについて話をし、その特色を知ることができました。

研修を通し、自分が今まで培ってきた視野を広げることができました。さらに、英語でのコミュニケーション力を身につけたいという思いも強くなりました。英語教師を目指しているので、カナダで得た経験を糧にしていきたいです。

学内で友人と一緒に

カリフォルニア大学アーバイン校

アーバインでの素晴らしい経験

総合文化学科　３年生

７月31日から８月31日まで、カリフォルニアのUCIに語学研修に行きました。一カ月という短い期間でしたが、学校での授業はもちろん、ホストファミリーとの生活やたくさんの場所を訪れることができたことなど、とても充実した貴重な経験となりました。

月曜日から金曜日まで毎日授業を受けましたが、楽しみながら英語を勉強する、いろんな国から来た留学生と英語で会話をするという先生方の授業方針のおかげで楽しく授業を受けることができました。日本にいる時よりも、積極的に発言して授業に参加し、たくさん英語に触れてクラスメイト達と楽しく勉強をすることができたし、いろんな国から来た留学生と会話をして異国交流を深めることができました。たくさんの国の人たちと話す機会を持てたことで、文化の違いや国民性の違いなども知れて、また再会したいと思える最高の仲間に出会うことができ、母語は違ったとしても同じ場所で英語を学び英語で会話することで絆が生まれたことをとても嬉しく思います。

大学があったアーバインは過ごしやすい気候と自然豊かな素敵な場所で、ホストファミリーや住民の方は親切な方ばかりでまた訪れたいと思えるところでした。

この一ヵ月間はたくさんの出会いがあり初めての経験をたくさんしましたが、英語圏で英語を勉強できたことは自分の中でとても意味のあるものになったので、この経験を生かして何事にも積極的に取り組んでいこうと思います。

クラスメイト達と

ニューカッスル大学

イギリス留学を通して

環境・バイオサイエンス学科　３年生

私がこの留学に参加した一番の理由は、新しい自分を発見し成長したかったということです。私は大学に入学すると同時に一人暮らしを始めたのですが、「今まで当たり前だと思っていたことがそうではない」、「わかると思っていたことがわからない」という経験を多くしました。そこで私はまずは短期間だけでも一から海外での生活を経験し、その留学を通して世界から集まる仲間と学び、実践的な英語力を身につけたいと感じ、英語発祥の地でもあり、私の行きたかった国でもあるイギリスを志望しました。しかし私は英語が実はとても苦手だった為、留学が決まった時はワクワクの気持ちと共にそれ以上の不安がありました。それでも、日本を出国しイギリスに着くと、staffの方が笑顔で迎えてくれ、私の中にあった大きな不安がすっと消えました。また、次の日からの学校でも、わからないことがあると私にもわかる英語で教えてくれ、毎日安心して授業を受けることができました。授業の前にあるconversationでは、コーヒーを飲みながら現地の文化や週末の出来事、おすすめの観光地やお店などを話すことができ、授業とは違った自由な会話を学ぶことができました。週末には学校活動に参加し、他国の人と交流を深めると共にイギリスの文化を観光を通して学ぶことができ、とてもいい経験になりました。私はこの留学から英語だけでなく、それ以上のものを得ることができました。英語がわからなくて通じないことがあっても、お互いが理解しようとしながら話すことで会話が盛り上がった瞬間は本当にすばらしいと感じました。これからはこの経験が無駄にならないよう、さらに世界を広げていきたいです。

学校後のアクティビティで夕食に行ったとき

西オーストラリア大学

自国を理解する大切さ

英文学科　２年生

私が留学をしたパースは自然豊かで穏やかな時間が流れている素敵な街でした。美しいスワン川が街のシンボルで、人々は川辺でピクニックや水遊びをして楽しんでいました。

初めて日本を離れて暮らしてみて、日本を客観的に見ることができるようになりました。特に私は中国人の友達がたくさんできました。私は彼らと日本政府と中国政府の問題や、人口問題、貧富差問題について毎日のように語り合いました。そこではニュースや新聞で得ていた知識とはずいぶん違った印象をうけました。一つの事柄でも、見る観点によって見え方が変わることを感じ、メディアなどに影響されていた自分が恥ずかしくなりました。また彼らは自国の歴史や政治問題などしっかりと理解していました。“自国を理解した上で他国を理解する”ということが異文化を理解することにつながるのだと思いました。自国のことを理解することがいかに大切かを思い知らされました。

今回の留学では英語の楽しさ、英語を使ってコミュニケーションがとれる素晴らしさを改めて知ったのはもちろんですが、国際問題に興味をもつきっかけになりました。またこのような機会があったときには、誇りを持って自国について話せるようにこれからしっかりと学んでいきたいと思います。この研修はとても充実していて一生の財産になりました。この経験はこれから先に繋がっていくと思います。この語学研修で学んだことを忘れず、いろいろなことに挑戦していきたいです。

コロンビアの友人とサウジアラビアの友人と

＜プロジェクト科目報告＞

冒険へのレッスン

英文学科専門教育科目 E238(2) Field Study B の一環として、去る９月１日から13日まで、本学２年生10名（うち文学部７名、人間科学部３名）および英文学科フクシマ准教授と中村の計12名でパリとロンドンを訪れた。

本科目は、国際感覚・対話力・創造力の向上を希望する学生を対象に、渡航先での英語対話実践が不可避な内容かつ仮説検証型の小規模調査プロジェクトを各自に自ら計画・実施させ主体性と実行力を高め、各自のプロジェクト完遂に必要な現地調査を３～４名の小グループ単位で自律的に行わせチームワーク力を伸ばすよう設計したものである。

履修生は、６月から３ヶ月に渡って開催された計８コマの渡航前学習会で現地文化・社会や調査法について学びつつ各自調査対象・方法を決め、渡航先では教員に依存せず小グループ毎に公共交通機関を利用し街を歩き回りながら、見ず知らずの人々を説得しインタビューやアンケート調査に協力してもらい、帰国後は３コマの学習会でデータ分析や映像編集について学びつつ動画を制作し、11月22日開催のオープンキャンパスにて実施した報告会で来学者を前に作品を発表した。

帰国直後の談話会で、今回の経験を通して今後はどこへでも行ける自信がついたと述べた者に他のほぼ全員が同調した。今後さまざまな冒険が履修生を待ち受けているに違いない。そんな未来の冒険へのレッスンはこれを以て、ひとまず成功としたい。

（英文学科准教授　中村 昌弘）

中国で体験する異文化

プロジェクト科目「中国で体験する異文化」は事前の講義、現地でのフィールドワーク、活動の振り返りという３つで構成されています。

まず、事前の講義では、現地に行く前に理解しておかなければならない中国文化・中国事情や中国語に関する知識、ならびに、日本人として知っておくべき日本文化・日本事情に関する知識を身につけました。

次に、現地でのフィールドワークとして、９月７日（日）から13日（土）まで本学の提携校である広東外語外貿大学を訪問しました。そこでは主に、中国語の学習、書道や切り紙といった中国文化の体験、現地の大学で日本語を勉強している中国人学生との交流という３つの活動を行いました。それらの活動の中で、中国人学生に対して日本文化・日本事情を紹介したのですが、学生が取り上げた日本文化・日本事情には、茶道、華道といった日本の伝統文化だけでなく、アニメ・マンガといった新しい日本文化やファッションなどに代表される「カワイイ」文化、「おおきに」や「あかん」などの関西弁を紹介するものもあり、中国人学生も非常に楽しんでいるようでした。

最後に、現地での活動を振り返り、パワーポイントでまとめたものを、11月14日（金）のプロジェクト科目報告会で報告しました。

この科目を受講し、普段できない体験をしたことによって、学生たちの視野も広がったのではないかと感じています。

（総合文化学科准教授　建石 始）

フィールドで学ぶ現代インドの諸問題

2014年８月30日から９月９日、総合文化学科プロジェクト科目の活動として、同学科の学生11名（２回生８名、３回生３名）が、インドのバンガロールおよび近郊の農村で、現代インドの諸問題に関するフィールドワークを行いました。事前学習では、M.ウェーバーの宗教社会学の視点からみたヒンドゥー教の特長、インドの貧困問題と女性・子どもに関する講義を通して、問題意識を高めました。

現地では、ストリートチルドレン、障害のある子ども、マザーテレサの施設、マイクロファイナンスの農村施設を訪問しました。また現地協力校 St. Joseph's College of Commerce の大学生と交流（歌やダンス、食事会など）を深めました。参加した学生は、人との触れ合いの意義を再認識する等、様々な成果を得たようでした。学生の感想を一部紹介します。

「人や物と触れることで普段体験できない『肌で感じる授業』を受けることができました。色々な訪問先へ行くたび、人の温かみを感じることができました。楽しいことばかりではありませんでしたが、間違いなく自分の糧になったと思います。」（総文２回生）

「知っていたことも、初めて知ることも『五感』から得る学びが加わり、一層深いものになったと感じます。また、現地での出会いなど『繋がり』を感じる研修にもなりました。貴重な経験をさせていただき全ての方々に感謝します。」（総文３回生）

（総合文化学科准教授　北川 将之）

音楽学部夏期講習会報告

2014年音楽学部夏期講習会は、７月30日(水)～８月２日(土)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取り組みを少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として、昨年度から講習会の受講は無料にいたしました。今年の講習会には227名が参集し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を直接感じ取っていただく機会になったことと思います。

講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエィション専攻については、聴音、楽典のテスト及び授業と、各専攻教員による個人実技レッスンの実施。またザビエル・ラック先生のフルートと岡田 将先生のピアノ演奏ミニコンサート、さらに、松川峰子先生のピアノ演奏、蜷川千佳先先生の伴奏による山田愛子先生の独唱に耳を傾ける楽しいひと時となりました。

また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島﨑 徹教授の特別講座、さらに舞踊専攻生による「ショート・パフォーマンス」が披露されました。

進学相談会では、参加生徒達の今後の夢を叶えるべく、さまざまな質問や相談に対応いたしました。

(音楽学部事務長)

保護者懇談会報告

今年度の保護者懇談会は４回行われました。まず全学科１年生保護者対象の懇談会が、５月31日(土)15時15分から家庭会大学部会総会に引き続き、本学院講堂で開催されました。出席保護者数は106名(91組)。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の挨拶と１年生学生主事紹介の後、共通英語教育、就職状況・就職活動、学生生活全般、留学に関する説明が共通英語教育研究センター教員および各部署の職員によって行われました。またその後個別懇談が実施されました。

地方会場ではまず和歌山県、大阪府南部在住全学年保護者対象の懇談会が、６月21日(土)11時30分からダイワロイネットホテル和歌山において開催されました。出席保護者数は35組、43名。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷、学生副部長の挨拶、学長の学事現況報告、学生部長の講話、キャリアセンター課長の最近の就職状況説明が行われました。昼食（懇談）をはさんで、午後から個別懇談が実施されました。また四国地区在住全学年保護者対象の懇談会が、７月19日(土)11時30分からJRホテルクレメント高松で開催されました。出席保護者数は31組、37名。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷、学生副部長の挨拶、学長の学事現況報告、学生部長の講話、キャリアセンター課長の最近の就職状況説明が行われ、昼食（懇談）をはさんで、午後から個別懇談が実施されました。

全学科２年生保護者対象の懇談会が、10月25日(土)10時30分よりエミリー・ブラウン記念館で開催されました。出席保護者数は66組、86名。学生生活支援センター課長の司会によって、学生部長の開会祈祷と挨拶、学長の学事現況報告の後、カウンセリングルーム専任カウンセラーの講演が行われました。その後個別懇談が各学科、各部署に別れて実施されました。いずれの会も和やかな雰囲気のうちに無事終了しました。今年度ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

(学生部長)

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験を行う機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするプログラムから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションを行うプログラムなど、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種のインターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

兵庫県庁（５名）、西宮市役所（３名）、兵庫県経営者協会／神戸商工会議所（１名）、兵庫県経営者協会／神戸マツダ（２名）、兵庫県経営者協会／植垣米菓（１名）、姫路経営者協会／姫路信用金庫（１名）、姫路経営者協会／姫路商工会議所（１名）、和歌山県経営者協会／きのくに信用金庫（１名）、堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会／大阪信用金庫（１名）、堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会／プロジェクト型（３名）、山口県インターンシップ推進協議会／サンデン交通航空事業部（１名）、関西環境管理技術センター（１名）、三菱 UFJリサーチ＆コンサルティング（１名）、野村證券（３名）、三井住友海上火災保険（８名）、関西アーバン銀行（１名）、尼崎信用金庫（２名）、富山第一銀行（１名）、JTB西日本（１名）、名鉄観光サービス（１名）、ウエスティンホテル大阪（１名）、ホテルオークラ神戸（２名）、近畿ホテルシステムズ（１名）、カース・キャリアセンター（１名）

KCC/KC インターンシッププログラム／Japan America Society of Chicago（１名）、Anderson Japanese Gardens（１名）、The Sketchy Artist（１名）

学生のインターンシップに対する関心は高く、４月と６月に各１回行われたインターンシップ・ガイダンスでは、合わせて600名を超える参加がありました。また、アメリカに学生を派遣する KCC/KC インターンシップの説明会、および派遣学生による報告会にもそれぞれ30名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

（キャリアセンター）

＜インターンシップ参加報告＞

KCCインターンシップ

英文学科　３年生

アメリカのイリノイ州、ロックフォードのアンダーソン日本庭園で１ヶ月間インターンシップをしました。日常的に、日本の品物を売っているギフトショップで接客をしました。接客を通して、ラフな英語だけでなく、丁寧な表現を新たに学び、英語の幅が広がりました。また、ガイドマップを英語から日本語に翻訳する機会がありました。日本では、授業で翻訳における知識の重要性を指摘されてきましたが、実際にガイドマップを翻訳してみて、日本庭園についての知識の重要性を実感しました。そして、１ヶ月間で１番大きなイベントである夏祭りでは、シカゴや日本から、日本文化にかかわる様々な方々が来ていました。その際に、書道家の先生の通訳としてお手伝いさせていただきました。書道の講義と、オープニングパフォーマンスのスピーチの通訳をする機会があり、緊張もしましたが、貴重な経験になりました。また、この夏祭り中に、日本文化について改めて考えることができたように思います。アメリカで日本文化に触れ、日本のよいところや、日本文化の素晴らしさに気づき、日本人であることや日本文化を誇りに思いました。私はこのインターンシップを通して、海外に日本文化の良さを伝える仕事がしたいと思いました。最後に、常に私のことをサポートしてくださったホストファミリー、庭園の従業員の皆様、KCC メンバーの皆様、キャリアセンターの皆様に本当に感謝しています。ありがとうございました。

アンダーソンジャパニーズガーデンズのシンボルと

インターンシップ参加報告

総合文化学科　3年生

私は8月4日から五日間、名鉄観光サービスのインターンシップに参加してまいりました。旅行会社はカウンターでの接客業務のイメージが強かったのですが、実際に拝見させていただいたお仕事は、お客様にご提案する前段階の、旅行の企画、レイアウト、そして営業でした。

インターンシップに参加した学生が私一人だったこともあり、主に社員の方のデスクを転々としながら、実践的なデスクワークを体験させていただきました。パソコンで海外旅行のタイムテーブルや、実際開催されるツアーの広告を作成するなかで、「分かりやすさ」を重視するようにアドバイスをいただきました。時差や名称などの情報を淡々と記入するのではなく、お客様の目に触れる物であるという意識を持ち続けることで、用いる言葉や画像が自然と抽出されていくことが、今回私にとって大きな気づきでした。

当初、私は社員の方からお話を伺おうという姿勢で、インターンシップの参加を決めました。しかし実際に参加すると、名鉄観光サービスの方々は常に「何をしたいか」私の意思を尊重してくださいました。その時、積極性の欠けた受け身な自分に気づき、自ら発信してアクションを起こしていかなければ、何も学び得ることはできないと痛感しました。

自発的に行動するためにも、今回の経験を活かし「社会へ出て実際に何をしたいか」という問いに具体性を持たせて、これから本格化する就職活動にのぞみたいと思います。

2014年度秋季大学教授会研修会報告

2014年度秋季の教授会研修会は「リベラルアーツ教育の現代的意義と将来性」というテーマで、10月10日午前10時40分から午後4時過ぎにかけて行われました。

皆様よくご存じのように、大学が社会に送り出す卒業生は、昨今、即戦力としての「人材」であることがより強く求められるようになっています。このような中、本学は創立以来行ってきたリベラルアーツ教育をより一層推し進めるべく副専攻制度を整えました。これは社会のニーズに応えつつも、他にも重要なものがあることを社会に訴えようとする気概に満ちた大学の方針とも言えるでしょう。

そこでこの度の研修会は、本学の現状と過去を踏まえて今後の本学の在り方について考察する機会としました。午前中には、まず入試部長の西田昌司先生に「神戸女学院大学のブランド力」のタイトルで本学の入試状況についてお話しいただいた上で、学長の飯先生に「『道標』（中期目標）――確認と展望」のタイトルで本学のこれまでの歩みと今後の指針をお示しいただきました。それを踏まえ、2018年から始まる18歳人口の一層の減少に関わる諸問題への対応策を検討している、2018年度問題ワーキンググループ（2018問題WG）の先生方に、「中間報告――リベラルアーツ＆サイエンス教育の拡充にむけて」のタイトルで、本学が全体として取り組むべきリベラルアーツ教育の一層の充実を目指した新しいカテゴリー科目群の設置などを中心としたご提案をいただきました。午後には、主に2018問題WGからの提案についてグループで活発に討議し、その討議内容を報告しあい、全体で共有しました。

院長先生を含む教員74名、職員16名の合計90名が参加した研修会は大変盛況で、今後の本学の在り方にとって大変意義深いものでした。

末筆ながら、会の準備のために奔走してくださった企画評価室及びFDセンターの職員の方々に心より感謝いたします。

（FDセンターディレクター）

2014年度大学職員 SD 研修会

今年度の大学職員 SD 研修会は、メインテーマを「これからの神戸女学院大学の教育を考える」と定め、大学の方向性を確認して、教育をサポートする職員としての立ち位置を確認することを目指しました。既に実施しました２回についてご報告いたします。なお、３回目を2015年３月に予定しております。

①第１回大学職員 SD 研修会（半日）
日時：７月30日（水）　13:30～15:15
場所：デフォレスト館206室
参加者：45名
司会：SD 研修会企画実行委員長
開会礼拝：チャプレン室職員
講話：川越栄子共通英語教育研究センター教授
「オリジナルテキストによる職員のための英語研修～英語で KC を紹介する～」

今、日本の大学は、国際的に開かれた教育を求められています。日本の学生を欧米・オセアニア・アジア各国に研修・留学のために派遣し、それらの国々から留学生を受け入れ共に学ばせ、日本人が国際的に活路を開き易くしようとしています。そのためには、大学職員はあらゆる部署で、外国人の教職員と学生の支援ができることが必要です。そこで、職員のための英語研修を計画しました。

川越先生より、まず、本学の学生に対する共通英語教育についての方法（ネイティブスピーカーとのコミュニケーションの基礎づくり、多読による読解力の基礎固めやイングリッシュ・カフェや英語講習会等の授業外サポート）についてお話しを伺いました。その後、学生が実際に自己紹介をしている場面を見て、私たちも自己紹介をしてみました。また、とっさの一言の練習を試み、オリジナルテキストにより、神戸女学院大学を紹介する文章を学びました。そして、いよいよ Let's try!「海外に高校訪問に行って、本学を紹介してみましょう」と課題をいただき、グループごとにスピーチを考えて、発表しました。良いスピーチが続出して、大学職員群として、日本語同様に臨機応変、理路整然と何事も英語で説明しうる力を備えていることを証明しました。

②第２回大学職員 SD 研修会
日時：９月11日（木）　10:00～15:00
場所：デフォレスト館208号室
参加者：午前の部58名、午後の部51名
司会：SD 研修会企画実行委員長
開会礼拝：中野敬一大学チャプレン
講話Ⅰ：飯　謙学長
「神戸女学院大学これからの道標」
講話Ⅱ：情報処理センター職員
「学内 LAN の無線化で何が変わる？」
防火訓練：瓦木消防署、甲東消防署と施設課

教授会研修会等で話題となっている「これからの神戸女学院大学の教育」について、職員も共有したい、無線化の実際について学びたい、職員から要望の多かった防災訓練を実施したいということで、この研修会を計画しました。

午前には、学長より、大学運営をめぐる学外の動きとそれに対応する本学の道標についてお話しがあり、英語教育の強化＝国際理解の精神、リベラルアーツ教育の整備と学修支援環境の充実をめざした本学の取り組みについて説明がありました。

情報処理センター職員からは、キャンパス内無線化の現状と予定が話され、この整備によりどのように教育と教育支援の質が変わっていくかというレクチャーを受けました。今後が楽しみです。

午後には、火災発生時の通報訓練及び煙体験・避難訓練をし、実際の煙のすごさと梯子の高さを実感し、消火器の使い方と放水について学びました。ご協力いただいた講師の先生方、消防署と施設課、企画実行委員他の皆様に感謝致します。

（大学事務長）

防災訓練の様子

陽～ひだまり～となった岡田山祭2014

大学祭実行委員会 委員長　総合文化学科　３年生

本年度は「陽～ひだまり～」をテーマに、実行委員52名で一丸となり、岡田山祭の企画・運営に努めました。岡田山祭は毎年、地域の方・神戸女学院生を支えてくださる方・岡田山祭に関わってくださる全ての方の温もりでできています。岡田山祭をそのたくさんの温もりと、それに対する私たちの感謝のパワーで満ちた「陽～ひだまり～」にしたいと考え、このテーマを選びました。

今年は模擬店数や発表団体の増加、学生モデルを起用したファッションショーの開催、出場者募集を行う企画の実施など、学生がより活躍できる岡田山祭にすることに力を入れました。今年は天候にも恵まれ、２年ぶりに中庭で開催することができました。学生や来場者のたくさんの笑顔が溢れ、岡田山は素敵な「陽～ひだまり～」になったように感じました。大きな問題なく開催できましたのは、委員それぞれが各自の役割を果たし、全力で目の前の課題を解決しようと努力したこと。そして何より、顧問の先生方、職員の皆様のご指導、ご協力があったからだと思っております。「岡田山祭を成功させたい」と同じ目標を持った仲間と出会い、ぶつかり、支え合い、励まし合い、様々な時間を共有しました。共に活動した経験は、私の一生の宝となりました。

最後になりましたが、岡田山祭を開催するにあたり、ご尽力賜りました学内外の方々に、深く感謝致します。

当日実行委員が着用しましたスタッフパーカーとパンフレット

集合写真

大学クローバー賞表彰式

昨年の台風とうって変わり、まるで夏の日差しを思わせるような日照りの中庭のステージで、大学祭初日の10月24日（金）のオープニングにおいて、小林学生副部長の司会により、大学クローバー賞の表彰式を実施した。

大学クローバー賞は、神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、昨年の９月から今年の８月までの１年間において、顕著な活動あるいは、優秀な成績をおさめた団体の栄誉を讃えて贈られる賞で、連絡協議会委員ならびに学生自治会委員の投票により選考する。

今年度は、コーラス部、学生 YMCA、ラクロス部、トランポ・ロビックス部、スカッシュラケット部、I.S.A. の６団体を選出した。それぞれの団体が、学内外で精力的に活動し、数々の大会で優秀な成績をおさめていること、他大学との交流も盛んで成果をあげていること等が評価された。

松田学生部長による受賞団体発表に続き、飯学長より各団体に表彰状と賞金が授与された。各団体とも受賞の喜びと今後の抱負を笑顔で語り、飯学長の課外活動への賞賛と励ましの言葉をもって表彰式を終了した。

（学生生活支援センター）

2014年度「めぐみ会賞」について

「めぐみ会賞」とは、学院の立学の精神である「愛神愛隣」にふさわしい大学学生・中高部生徒の自主的な活動を奨励するために設けられ、今年で13回目の授与となります。

2014年度大学受賞団体は昨年に続いての「学生YMCA」と「コーラス部」。「学生 YMCA」は、様々なボランティア活動を企画実行し全国各地に良き出会いの場を広げて活動をされています。「コーラス部」は、学内のチャペルアワーや入学式での活動をはじめ、他団体との交流を深め合唱連盟にも加盟され活動の場を広げておられます。10月24日（金）岡田山祭のオープニングで授与いたしました。今年の岡田山祭のテーマは「陽～ひだまり～」でした。「陽だまりの居心地の良さは外の寒い風から守ってくれているものの存在があって初めて得られるものだと思います。保護者や先生も学生生活を守ってくださりたくさんの人々の祈りと努力によって今日の女学院の居心地の良さは守られています。たくさんの温もりを感じながら学生活を送ってください。」と、めぐみ会小澤妙子会長が挨拶いたしました。

2013年度中高部受賞団体は、「雫の会」と「Ｓ役員会」でした。2014年度中高部受賞団体は１月に、選考・表彰いたします。

「めぐみ会賞」はクラブ・同好会だけでなく、社会貢献している小さなグループも対象となります。来年度も多くのグループから応募されることを願っております。

（公益社団法人神戸女学院めぐみ会　副会長）

大学祭で小澤会長より授与

＜私の研究＞

ドス・パソスの語り

三杉　圭子

20世紀前半のアメリカで活躍したジョン・ドス・パソス（1896-1970）という作家がいます。第一次世界大戦時に成人して伝統的価値観の崩壊を体験した「失われた世代」と呼ばれるグループのひとりです。ヘミングウエイや『華麗なるギャツビー』のフィッツジェラルドは彼の友人でした。1925年に発表した『マンハッタン乗換駅』は当時美術界で旋風を巻き起こしていたキュビズムのような手法でニューヨークの街を描いています。1930年代にはアメリカ社会を包括的に描いた大作『U.S.A.』三部作（1938年合本）を発表しました。ここでは機械文明と資本主義のうねりにのみこまれていくアメリカとその人々を、映画のモンタージュのような手法で描出し、彼は当代における最も重要な作家と称されました。その後アメリカでは社会派小説があまり論じられなくなり、ドス・パソスの名は文学史に刻まれてはいるものの、実際にその作品を読む人は多くありません。けれど、キュビズムにしろモンタージュにしろ、言葉から立体的あるいは動的な世界を立ち上げようとした彼の手法は、新しい時代にふさわしい新しい表現を模索した果敢な挑戦でした。それは今日の私たちにも新鮮な驚きを与えてくれます。

今年の10月、アメリカで第一回ドス・パソス学会が開催されました。各国から熱心な研究者が集まり、作家の孫にあたるジョン・ドス・パソス・コギン氏とともに、絵画、映画、同時代の作家との関連からジェンダーの視点まで、多彩な研究成果を共有しました。私は彼の男性性の表象について報告し、貴重な意見交換の機会を得ることができました。

小説を読むには、何が書かれているかだけでなく、どう書かれているかを味わう愉しみがあります。それをより多くの人に知ってもらうためにも、新しい文明を表現するための新しい技法を試みたドス・パソスを授業でも紹介していきたいと思っています。

（総合文化学科教授）

研究室を飛び出して　～そういうお年頃～

矢野　円郁

私の専門は認知心理学で、院生時代は記憶研究に没頭しました。誤った目撃証言によって冤罪を被る人をなくしたいと思ったからです。「なぜ人は誤った記憶にも確信を抱いてしまうのか」という疑問のもと、記憶のメカニズムを研究しました。社会的な問題から出発したものの、当初の研究は実験室内での基礎研究でした。そのうち、記憶障害などの症例に対する検査やリハビリテーションの仕事にも携わるようになり、臨床現場での研究や実践に興味がシフトしていきました。その後、中京大学心理学部・応用心理学領域の助教の職を得て、「交通心理学」という研究領域に出会いました。雨風や暑さも厭わず道端に立って交通調査をしたり、小学校へでかけて交通安全教育を行ったり、“現場”での研究が増えていきました。

昨年度本学に着任して以来、関西圏の交通関係、特に自転車の交通安全教育に関する仕事の依頼が増え、地域と連携した活動や研究の機会がますます増えています。また、かつての臨床経験を活かして、小学校の特別支援学級の補助や、学習障害児のサポートも始めました。勿論、基礎的な実験研究も重要で、それを希望する学生の指導も楽しんでいますが、私自身は心理学を“使って”現場で実践したいお年頃なのです。「交通」や「学校」を通じて地域社会とつながった研究は、本学着任時から担当している副専攻プログラム「地域創りリーダー養成プログラム」の授業にも活かすことができ、実のところ専門の授業以上に楽しんでいます。

とかく認知心理学のような基礎心理学は、実社会との関連が見えにくい学問ですが、教育の現場では心理学が役立たない場面はありません。何はともあれ、これまでの私の人生で最も心理学が役立ったのは、上膳据膳人間だった相方が、3年の教育の結果、今やすすんで料理までするようになったことです。心理学は人そして社会を変えうるのです！

（心理・行動科学科准教授）

＜ゼミ紹介＞

zemi introduction 2014

Shawn BANASICK

My research specialization is International Relations, so many of the students who take my Seminar courses are interested in geopolitics, international conflict, and human rights. However, I do not limit students to topics in International Relations - my students are free to do research in any field of the social sciences. For example, students in previous years have examined topics such as water resources in Italy, conflicts over gun control in the United States, and the effects of a new airport on tourism in Okinawa. I also try to do some fun things with my Seminar students, such as going on trips to nearby places or going out for dinner.

（英文学科教授）

Pizza party with my Seminar Students

ヴァイオリンのメソード

辻井　淳

基本的に個人レッスンとなります。

ヴァイオリンのメソードは可視的でオープンであり、誰であっても興味さえあれば理解できるものです。

声楽や管楽器の場合、息の流れは見えませんが、弦楽器では息に相当するボーイングは視覚的にも理解することが可能です。

弾くという行為は物理特性に基づいていて、からだの使い方を中心に指導していきます。また、作品理解の助けとなるような事柄、作曲家が政治的にどうであったかとか、食べ物の嗜好、交友関係や金銭欲など人間理解を重要なポイントと考えています。さらに、ヴァイオリンは一人で演奏する独立楽器というよりは、やや依存型の楽器で、他者とのコミュニケーションの重要性を理解するように指導しています。守備範囲は広大で、ピアノとの演奏以外に室内楽、オーケストラ、オペラ、バレエ、クラシック以外の音楽も含めあらゆるジャンル、あらゆる楽器を演奏する人々と付き合っていかなければなりません。

からだ、特に腕を使うという点では、スポーツ、武芸、細工師、調理人などと共通点がありますが、楽器の操作においては生涯をかけて向かいあっていくもので、オリンピックなどの短期決戦型とは、大学における訓練の方法が本質的に異なります。また耳の訓練も大切ですが、音を聴くというのは時間的には過去で、予測できる能力の開発が上達の鍵になっています。

これらのこと、楽しいことと理解してもらうために日夜苦闘しています。

（音楽学部准教授）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］

杖道会

主　将

私たち杖道会は現在部員14人で、毎週月曜日と金曜日の17時から19時に第１体育館でお稽古しています。杖道とは日本の武道のひとつであり、杖道会のお稽古では杖と木刀（太刀）を使用し、12の形を演武できるように内田樹先生のご指導のもと練習に励んでいます。日々のお稽古では試合形式での勝ち負けは無く、身体の使い遣い方や術理を自分たちのペースで学び、自分で活かせるようになるための練習をしています。

大学でのお稽古のほかに、夏休みと春休みには合宿、岡田山祭では合気道部と合同で演武会を行なっています。これらの行事には毎年 OG の先輩方もご参加くださり、質が高く実りの多い練習ができるためとても気持ちが引き締まります。

今年は７人もの新入部員が入部し、杖道会はますます活気に満ち溢れてきています。「何か武道をしてみたい」、「新しいことへのチャレンジとして」、「クラブ紹介の演武を見て興味を持った」、など新入部員の入部動機も様々です。部員全員が杖に触ったことの無い初心者の状態から入部し、杖と太刀の持ち方から学んでいきました。運動の得意・不得意に関係なく、杖や太刀を振るときの身体の使い方、呼吸、姿勢を意識することで強い力の使い方を知ることができます。これからも自分の身体と真摯に向き合い、現状に満足すること無く、部員と切磋琢磨しつつお稽古に励んでいきたいと思います。

［クラブ］

箏曲部

部　長

私たち箏曲部はバザーや学園祭での演奏を目標に日々練習に励んでいます。自主練習を始めとし、パート練習や合奏をしています。岡田山ロッジ217・218号室で活動させていただいており、月に1度神戸女学院大学箏曲部の卒業生である先生にご指導していただいています。主に演奏している曲は、「さくらさくら」のような古曲やお歌もので、現代曲なども演奏しています。演奏会に伺うなど、他大学の邦楽部、箏曲部の方々との交流もあります。

お箏は右手の親指、人差し指、中指に「お爪」と呼ばれるものをつけて演奏します。ただ、弦をはじくだけではなく、左手で弦を垂直に押すことで音の高さを変えたり、トレモロをするなど他にも多くの奏法があり、とても奥が深い楽器です。

10月25日(土)に行われた学園祭では「手・て・テ」という曲を演奏させていただきました。6月頃から何度もお稽古を重ね、当日には練習の成果を発揮することができました。

また普段の生活の中では、お箏の演奏を耳にする機会はあまりないと思います。箏曲部で、お箏に触れることができるのは、とても貴重な経験になっています。また、部員同士の仲も良いので、アットホームな雰囲気で活動させていただいています。これからも楽しく、練習に励みたいと思います。

学園祭

中高部報告

ヴァージニア・クラークソン記念館の竣功

1955年、学院創立80周年記念事業の一棟として中高部２号館が建てられました。それから半世紀以上、あの1995年の阪神大震災にも耐えぬきましたが、老朽化も激しく、生徒達にとりましても劣悪な環境の校舎となってしまっておりました。学院全体の中長期計画の中、紆余曲折があった末、コムセンターの改修工事とセットで２号館の建替が承認されることとなりました。2012年２月16日に開催された学院施設委員会がその出発点となり、その後計３回開催された中で株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所が設計担当として採択されました。それから2013年２月までに計８回に及ぶ基本設計委員会が開催され、新築棟の概要が固められました。2012年３月から2014年７月の完成に至る間には、さらに計21回の実施設計検討委員会（総合定例打合会議）が開催されました。中高部からは北田教頭と私が担当の任に当たらせていただき、設計事務所様をはじめ、コンサルタントをお引受けいただいた石田忠範氏、今竹翠氏をはじめ、施工業者の銭高組様、YOU 設備工房様他、そして施設課の皆様との多大なるご協力、ご尽力により、要望どおりの機能性と、奥まった位置にあって清楚なたたずまいを感じさせる美しい新築棟に生まれ変わることができました。

１階には旧２号館から引続き社会科教室が広くとられました。２階には、本学の英語教育のさらなる充実の為に、最新の機器を導入した LL 教室を２教室と、常に優秀な成績を収めているスピーチコンテストの指導練習の為の録音室を２室配置しました。３階には生徒達が多目的に活用できることを最大のコンセプトに、充実した AV 設備、大型の備付け姿見等々の設置により、今までにない充実した活動空間（通称 トリニティホール）が実現されています。この空間は生徒達にも教職員にも大人気の空間となり、竣功以来毎日のクラブ活動や文化祭の行事、学年礼拝、講演会、保護者懇談会等々、多種多様な用途で利用されています。

中高部にとりましては夏休みの初日でもありました本年７月14日に、３Ｆトリニティホールにて多くの関係者にお集まりいただき、献堂式と定礎式が神様のお導きの下挙行されました。1879年、第２代校長に就任されたクラークソン先生により「英和女学校」と改称されてから本年で135年となることから、これを記念して表題のとおり先生の御名を新築棟の名称（通称 VC 館）とさせていただいたことが披露されました。

（中高部事務長）

ヴァージニア・クラークソン記念館

中学校女子サッカー部フェスティバルに参加して

中学部　３年生

私たちＪサッカー部の有志11名は、11月１日～３日にかけて静岡県の時之栖スポーツセンターにて行われた中学校女子サッカー部フェスティバルに参加させていただきました。このフェスティバルは、女子サッカー発展のプロジェクトの一環として、『“Live Your Goals”～それぞれの夢（ゴール）を生きる～』をコンセプトとして、日本サッカー協会（JFA）主催で行われたもので、全国各地から集まった103人の女子選手が参加しました。

普段私たちは、近隣校との練習試合しか行っておらず、全国各地のチームと試合をしたり、他校の方々とチームを組んでトレーニングを行ったり、試合をしたりするのは初めてだったので、たくさんの刺激を受けたと同時に、サッカーの楽しさや、同じ志を持ちながらプレーする「仲間」がいることの素晴らしさを改めて感じました。

また、このフェスティバルのコンセプトである『“Live Your Goals”～それぞれの夢（ゴール）を生きる～』をテーマとしたお話を、なでしこジャパンの佐々木則夫監督と、野田朱美 JFA 女子委員長から伺い、自分の夢や将来について考え、自分自身と向き合うきっかけをいただきました。私の夢（ゴール）はどのようなものになっていくかまだまだ分かりませんが、このようなフェスティバルに参加させていただけたことへの感謝を忘れずに、自分自身の夢（ゴール）へと歩んでいきたいです。

高等学部校内大会

2014年度の高等学部校内大会は、１学期期末試験終了後の７月７日(月)に行われました。種目はドッジボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの５種目で、全学年クラス対抗戦で試合が行われます。各クラス、思いが詰まったクラスＴシャツに着替え、どの競技も熱戦が繰り広げられました。今年は先輩に全力で挑むＳ1、Ｓ2学年の頑張りが印象的でした。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る１日となりました。

ドッジボール
　１位Ｓ１Ｂ　２位Ｓ１Ｃ　３位Ｓ３Ｃ
バレーボール
　１位Ｓ３Ｃ　２位Ｓ３Ａ　３位Ｓ３Ｂ
バスケットボール
　１位Ｓ３Ｂ　２位Ｓ３Ｃ　３位Ｓ３Ａ
卓球
　１位Ｓ２Ｃ　２位Ｓ２Ａ　３位Ｓ２Ｂ
リレー
　１位Ｓ３Ｃ　２位Ｓ１Ｃ　３位Ｓ２Ｂ

総合
　１位Ｓ３Ｃ　２位Ｓ２Ｃ，Ｓ３Ｂ　４位Ｓ３Ａ
ブービー賞
　Ｓ２Ａ

（保健体育科）

中学部校内大会

7月9日(水)中学部校内大会が行われました。グラウンドで開会礼拝後、各クラスの選抜メンバーによるリレーを行ないました。午後は雨の予報でしたので、リレーの予選後すぐに、決勝を行ないました。その後、ポートボール・卓球・ドッジボールａ・ｂの３種目に分かれ、クラス対抗で試合を行いました。各種目のメンバーで緻密に立てた作戦や、練習の成果を発揮することができており、各試合盛り上がりました。表彰式では、ＧⅡ２階に集合し、皆の健闘を称えあいました。暑い一日でしたが、１学期の締めくくりの行事として皆が、笑顔で無事終えることができました。

総合
　１位Ｊ３Ｂ　　２位Ｊ３Ｃ　　３位Ｊ３Ａ
ドッジボールａ
　１位Ｊ３Ｃ　　２位Ｊ３Ｂ　　３位Ｊ３Ａ
ドッジボールｂ
　１位Ｊ３Ｃ　　２位Ｊ３Ｂ　　３位Ｊ２Ｃ
ポートボール
　１位Ｊ３Ｂ　　２位Ｊ３Ｃ　　３位Ｊ２Ａ
卓球
　１位Ｊ３Ａ　　２位Ｊ３Ｂ　　３位Ｊ３Ｃ
リレー
　１位Ｊ２Ｂ　　２位Ｊ２Ａ　　３位Ｊ３Ｂ

（保健体育科）

釜ヶ崎訪問報告

6月14日(土)にＳ3生徒13名と引率教員２名で釜ヶ崎いこい食堂を訪れ、炊き出しのお手伝いをさせていただきました。

食堂に到着するとすぐに、炊きたてのご飯でおにぎりを作り始めます。できるだけ同じ大きさで、ふっくらとしたおにぎりを配れるようにと心がけながら、生徒たちは作業に没頭していました。おにぎりと野菜中心のスープを作ると、大勢の方が列を作って待っておられる公園へと向かいます。そこで私たちが目撃したのは、釜ヶ崎では日常的でありながらも、私たちの日常からは切り離されたような光景でした。おひとりおひとりに食事を配っている間、生徒たちは、大きな隔たりを感じていたことと思います。そして、その隔たりは決して乗り越えられないものではないという可能性についても考えていたように思います。

炊き出しが終わると、私たちはいこい食堂に戻って礼拝と語らいの時を守りました。整理しきれない心のうちを言葉にするのは大変なことですが、参加者は自分たちの感じたことを語り、米加田牧師のお話に聞き入っておりました。生徒たちの話しを聞きながら、参加者はこの訪問を通して、自分自身の生き方を深く見つめ直すと共に、視野を大きく広げる機会が与えられたのではないかと感じました。

今回の訪問がそれぞれの参加者にとって、またその報告を聞いたすべての生徒にとって、よき学びの機会となることを心から願っております。

（宗教委員会）

私たちにできること
私たちにしかできないこと

高等学部　１年生

私はこの夏、長島愛生園・邑久光明園訪問に参加しました。到着してすぐにハンセン病差別をなくすためにたたかっておられる方とお会いし、当時の過酷な環境を思わせる療養施設を見て改めて衝撃を受けました。そして、当然のことなのですが私たちの訪問をよくは思わない方々がおられることも実感しました。資料館見学や光明園園長の先生による講演、居住者訪問を経て、誤った認識のもとで周囲に偏見の目を向けられる無念さや家族と縁を切られ無理矢理引き離される辛さ、そんな苦痛の中救われることなく亡くなった方が大勢おられることを知りました。私がお会いした方々は皆様とてもあたたかく、過去の傷をえぐるような質問を繰り返す私たちに対して親切丁寧に答えてくださりました。この方は今どんな気持ちでお話をしてくださっているのだろうと考えると、涙が止まりませんでした。

ハンセン病の差別は今も無くなっていません。差別撲滅運動の中心でおられた方が相次いで亡くなり、隔離裁判についてのニュースが報道される今、日本全体で差別問題に向き合わなくてはなりません。私は、この訪問で感じられた悲しみ、痛み、そして私たちを迎え入れてくださった優しさを一生忘れません。元ハンセン病の方々の数少ないメッセージを受け取ることができた一人として、世界中にある差別、これから起こる差別をなくさなければいけないと思います。

広島訪問に参加して

高等学部　２年生

私にとって３回目最後の広島訪問でした。Ｊ３以来の久しぶりの訪問となったため、広島女学院の中でも中心メンバーが同級生となっており、広島女学院の方たちの活動のすばらしさ、尊さを、より現実的に感じました。

今回の訪問では皆の念願叶って、２日目の午前中に平和記念公園内での署名運動に参加させていただけました。夏休みということもあり、たくさんの海外の方がいらしていたのがとても印象的でした。通りすがる方お一人お一人のお顔を見て、時に英語で署名をお願いすることは、想像以上に大変で勇気が必要でした。同時に、私達が文化祭等の際校舎内で行う署名活動がどれだけ守られたものであり、恵まれたものかを考えさせられました。

これまでは広島訪問に参加する度、広島女学院の皆様の同世代とは思えない行動力に、何度も感動し自分たちも同じように行動を起こさなければ…と焦りを感じていました。しかし、実際に広島で署名活動に参加させていただいたことで、関西の中高生である私達にできる平和への行動、というのはまた新たな視点を探せるのではないか、また探さなくてはならない…と、今は考えています。

３度の広島訪問に与えてもらったことは数えきれません。同世代の学生たちの平和への想い、被爆者の方々から直接伺った平和への想い、他にもたくさんの想いと広島で出会いました。その想いを忘れずに学んで行きたいと思います。この訪問に関わってくださった全ての方々に感謝します。

リーダーシップトレーニングキャンプ

今年度のリーダーシップトレーニングキャンプは、７月21日(祝)～23日(水)の３日間、山東自然の家にて行われました。参加メンバーはＪ２からＳ２の生徒50名と引率教員６名です。天候にも恵まれた３日間、来年度のＪ１デイキャンプに向けて様々な活動に取り組みました。例年自炊を３回行っていたところを２回に減らしたことで、時間に余裕ができ、それぞれのプログラムにじっくり取り組むことができました。新Ｊ１を迎えるにあたって必要なコミュニケーション能力をつける工夫も随所で見られました。毎年参加希望者が非常に多いため、抽選で当たった人しか参加できません。そのため、誰もが始めからリーダーシップを取れるわけではなく、少しずついろんな経験をして、リーダーとしての動き方を学んでいきます。緊張して全然話ができなかった下級生たちが、徐々に人前で話し、仕事を見つけて活発になっていく様子は、宿泊行事ならではの光景だったと思います。反省すべき点を共有し、すぐに改善に向けて行動してくれたＳ２のおかげで、本当に気持ちの良い３日間でした。例年にはあまりなかった、参加者全員でじっくり落ち着いて話し合う時間も持つことができ、今後を見据えた意見交換ができたことも良かったです。参加した50人すべての生徒が、リーダーとしての自覚を持ち、高い意識を持って学校生活を送るきっかけになっていればうれしいです。

（ディレクター）

2014年度夏山登山―白山

今年度の夏山登山は、７月30日～８月２日の期間Ｊ２からＳ２までの生徒44名と教員10名、そして山岳ガイド、JTBの添乗員と総勢56名での登山となりました。ふたつのパーティで時間差をつけ白山を日本海側の石川県から入り、岐阜県側に下りるという縦走コースにチャレンジしました。このコースは、大雨が降ると両側の車道が閉鎖され閉じ込められるということもあり、天気の安定を祈りながらの歩行でした。伝説の多い南竜ヶ馬場は、水の豊富な場所だけにお花畑は見事なものでした。そこでの時間はたっぷりとあったので各々にゆっくり時間を過ごすことができました。翌朝、最終泊の室堂で大きな荷物を預け、早速頂上にアタック、全員無事に頂上に到達しました。山上では、みんなでお弁当をひろげ、学年ごとの記念写真を撮りました。その後、火口の底に下りお鉢めぐりとなりました。やはり、午前中の山行で正解。夕方は、大雨となりました。最終日は、ご来光を見るため朝４時半起きで再度頂上へ行き、運良く雲の切れ間からご来光を眺めることができました。今回は天候にも恵まれましたが、それ以上に生徒や教員の頑張りで、全員無事に登山終点地白水湖に到着できました。そして、携帯も繋がらない山の奥地にある一軒宿で購入したハーゲンダッツのアイスクリームを全員で食し、安堵と達成感に浸っていました。

（夏山登山ディレクター）

2014年度訪豪研修旅行報告

8月5日から23日までの日程で、15回目となる訪豪研修旅行を実施いたしました。参加者はS1生徒20名と引率教員2名でした。

この研修旅行は姉妹校であるMethodist Ladies Collegeとの交流プログラムを柱としています。28年前にお互いの学校を訪問することから始まった交流は、正式な姉妹校として交換留学生や訪問団の受け入れを重ねてきました。今回の訪問でもホストファミリーやMLCのスタッフの皆様にはあたたかい歓迎をいただき、有意義な時を過ごすことができました。

5日から9日までは研修の導入としてケアンズ、シドニーを観光してオーストラリアの自然と文化に触れる時間をもちました。生徒たちは食事や買い物の場面で英語での会話を試している様子で、少しずつ自信を深めていることが分かりました。

ケアンズ、シドニーでの観光を終えていよいよパースに降り立つとすぐにホストファミリーが待っていてくれるMLCのキャンパスに向かいました。バスの中で生徒たちは緊張した様子でしたが、それぞれの家族の歓待を受けて安心した様子でした。

翌10日からはホストファミリーのお宅から通学することになり、毎日、それぞれの家庭での出来事を楽しそうに話し合っていました。

神戸女学院の礼拝に当たるアッセンブリーでは神戸女学院の訪問が在校生に知らされ、教員と団長が代表で挨拶をしました。第一回の訪問の引率者であった教員から両校の交流の歴史を踏まえたお話があり、交流の意義を確かめる機会になったのではないかと感じています。参加生徒は全員がパワーポイントを使っての自己紹介をいたしました。

MLCでは特別授業としてESL、美術、裁縫、調理、オーストラリアン・フットボール、ダンスを実施していただきました。どの授業も、もちろん英語で進められましたが、楽しんで参加できるように工夫されていたように感じました。MLCでは日本語の授業も開講しており、生徒たちはその授業のお手伝いをさせていただきました。

また、校外学習についてもピナクルズ国立公園やワイルドパークでの研修、マーガレットリバーでの一泊研修など充実したプログラムを用意していただき、楽しい思い出ができました。特に、一泊研修は今年が初めての企画でしたが、巨大な洞窟での研修や自炊体験を生徒たちは心から楽しんでいる様子でした。

あっという間にさよならパーティーの日を迎えホストファミリーとの別れを惜しみました。生徒たちはこの日のために、合唱の練習をしてきました。スタジオ・ジブリの映画から3曲と「花は咲く」を披露し、好評を博しました。この会では引率教員2名と副団長が挨拶をし、MLCからの訪日旅行団を楽しみにしている旨をお伝えしました。ホストファミリーと共に座る生徒たちの様子を見ていると、よい出会いが与えられたことが分かりました。

翌日の午後にMLCでホストファミリーとお別れをしました。ここでは全員が別れを惜しんで、涙ながらに話しこみ、ハグしている様子が見られました。2週間という限られた時間ではありましたが、語学研修という枠を超えて、ホスピタリティの精神を学ぶ恵まれた機会になったのではないかと感じています。そしてパースを少し観光して日本への帰路につきました。

今回の訪問を通して、私はMLCと神戸女学院の繋がりが本当に恵まれたものであることを思い知りました。中高部では国際教育を大切にしてまいりましたが、MLCとの繋がりと人的交流が両校にとって貴い学びの機会になっているのだと思います。

これからもこの姉妹校としての繋がりが大切に続いてゆくこと、そして両校の生徒と家族が貴い学びの機会を共にしてゆくことができますようにと心から願っています。

（中高部）

中高部 教職員研修会

本年度は、今までの本校で行う日帰りの研修会から、９月２日(火)～３日(水)にかけて市内にあるやっこ旅館にて一泊研修という形をとりました。

２日(火)午後13時にやっこ旅館大広間に集合し、聖書科教諭による礼拝、中高部長による挨拶によって研修会が始まりました。

２日(火)

○「教科紹介冊子を吟味する」(13:10～15:10)

今年度より、我々神戸女学院中高部の教科の取り組みがわかる冊子をキャンパス見学会などで配布できるようにしよう、と「教科紹介冊子」の作成を計画いたしました。その前段階として、まず研修会で発表し、それを冊子の原案にするためにこの時間を設けました。各教科には夏休み前に告知し、この研修会のために準備していただきました。

全教科で120分であったため、国語からはじまり聖書、探究まですべての教科が８分程度の短時間にその特徴をわかりやすく発表しました。

後日、この内容に修正を加えた資料を完成させ、キャンパス見学会で配布することができました。

○「教員間研修について考える」(15:30～16:30)

休憩をはさんだ後、職員は別室にて、職員研修を行い、教員は引き続き大広間に残り、「教員間研修について」討議いたしました。教員間研修とは、お互いの授業の向上のための取り組みや、経験の浅い教員への担任業務の研修などを意味します。

最初に討議の方法について係の教諭から説明がありました。その後、班ごとに分かれて、一枚の大きな紙に、付箋を用いて、現状の各教科で行っている研修方法や、新たな研修方法、それぞれの研修の問題点など意見をだしあって、よりよい教員間研修について討議いたしました。分団で討議した内容は、３日(水)の午前に発表し、皆で共有しました。

○「職員研修」(15:30～17:50)

職員部は AED の使い方を DVD で視聴したあと、人形を使って実際に訓練を行いました。またそのあと、セキュリティ対策として、情報の機密性や安全性について意見を交わし、生徒の情報の取り扱いについて今後もさらにどのように努めるべきか等、実例を交えながら話し合いました。

○S３の３学期について考える (16:40～17:50)

近年Ｓ３の担当している教員から、進路を控えたＳ３の３学期について、現状の問題点をあげていただき、班ごとに分かれて、改善するにはどうすればよいか話し合いました。一つの方向に集約するまではいたりませんでしたが、意見交換することで現状にいたった経緯などを確認することができました。

３日(水)

○教員会議 (9:00～10:20)

３日(水)は朝食のあと、まず、前日に話し合った「教員間研修」と「Ｓ３の３学期について」の各班の発表、そして職員研修の内容について報告をしました。その後、夏休み中の行事について各担当教員が報告しました。

2014年度の中高部教職員研修会は以上のような内容で行われ、教頭の挨拶、聖書科教諭による奨励による閉会礼拝をもって11時に終了しました。

全ての議題の中で、時代の流れの中で、変わるべきところ、そして守り続けるべきものについて確認でき、大変有意義な時間でした。

また、久しぶりにおこなった一泊研修は、よりたくさんの研修が行えたことはもちろん、校外の違った環境で行ったことで、気持ちもあらたになり、また夜遅くまで語り合えたことで、教職員のなかにより深い絆ができたと感じた二日間でした。

(校務課 研修会係)

文化祭　９月19日(金)～20日(土)

天候面では、ほぼ晴天に恵まれ、予定通りスムーズに実施できた文化祭であった。

クラス、クラブ、有志団体、文化祭企画実行委員会等が約１年を費やし、この日の為に準備してきたことが一つ一つ具現化してゆくのを生徒達と共に見守れて幸いである。

今年度のテーマは「Circus」。

Circus のように明るく賑やかな文化祭をイメージして創り上げられた。

校内用のバラエティショウでは、大笑いしたり、作品の完成度に感心したりと、非常に和やかで楽しい時間を皆で過ごした。

夏休みの炎天下、地味な作業を黙々とこなしていく子たちに今更ながら感銘を受けた。文化祭企画実行委員会では藤棚係、天井係、机いす係の勤勉さは特に印象深い。

文化祭は企画の内容が決定的に重要であろう。

「文化」に値するものを創り出す為には。

今後の課題として、クラスを核とした各団体が、充分な企画を構想する時間的余裕を持てるよう学校、教員側が保障してゆく工夫が必要ではなかろうか。

文化祭企画実行委員会の生徒の中にも、礼儀正しく勤勉で、そして他者への心優しい声かけができる子が多く目についた。悦ばしきことである。

好天の下、御来校された皆様と生徒達の笑顔に包まれながら今年度の文化祭を無事実施した。

（文化祭企画実行委員会顧問）

J1秋の遠足

集合時刻ぴったりに生徒141名全員が集まり、鳴門・大塚国際美術館に向けて出発しました。はじめは少し雨がぱらついていましたが、そのうち雲も晴れ、明石海峡大橋を渡る頃には陽がさしてきました。両側に海を臨みながら渡る大きな橋に歓声をあげ、あちこちでシャッターを切る音が聞こえてきます。途中トイレ休憩をとり、予定通りに鳴門に到着し、鳴門大橋を背景にクラス写真を撮りました。このころには天気もすっかり良くなり、鳴門大橋にある渦の道を見学し、その後すぐ近くにある食堂で学年礼拝をもち、昼食になりました。鳴門大橋の下でとれた鯛のお刺身やわかめ、鳴門金時など当地の特産がたくさん詰まったお弁当でした。昼食後は大塚国際美術館へ。初めにクラスごとに学芸員のレクチャーを受けた後、班ごとに自由見学。事前に学習したことや聖書の授業で習ったことも思い出しながら、思い思いに広い館内をまわっていました。何よりシスティーナ礼拝堂の大きさと迫力に圧倒されたようです。帰りは淡路ハイウェイオアシスで少し時間がおしましたが、幸いひどい渋滞もなく、予定より早く帰ることができ、とても順調に終わった遠足でした。大塚国際美術館では今年団体で来館した学校などに図録をくださるとのことで、「大塚国際美術館300選」を29冊いただきました。今後の事前学習に役立ちそうです。引率教員は、７名でした。

（Ｊ１学年主任）

J2秋の遠足

10月17日（金）、バスで奈良方面に行ってきました。午前８時30分に西宮北口を出発し、午前10時に法隆寺に到着しました。事前に見所など学習したこともあって、学習冊子片手に各グループとも熱心に建物や国宝を見学していました。

次に奈良市内に向かい、「なら和み館」で昼食をいただきました。お腹がすいていたのか、すぐに昼食をたいらげ、予定より15分早くならまち自主研修を開始しました。東大寺、奈良公園、ならまちめぐりと思い思いに見学や散策を楽しんでいました。地図を片手に迷ったり、地元の人に道を尋ねたり、おいしいものを探したり、みんな一日奈良を満喫していました。また、この遠足でみんながさらに仲良くなったように思えました。

あっという間に研修終了の午後４時になり、バスに乗り込み、西宮へ向かいました。

この日は天気もよく、とても気持ちのいい一日でした。

引率教員は、６名でした。

（Ｊ２学年主任）

J3小旅行

Ｊ３は、２泊３日で北陸方面へ全行程バスで行きました。西宮北口に集合し、最初の目的地の「加賀伝統工芸村・ゆのくにの森」では、グループに分かれ、ガラス工芸、輪島塗の沈金や金箔貼り、加賀友禅の型染め、九谷焼の絵付け、紙漉きなどの体験を行いました。その日の宿舎「たがわ龍泉閣」では、「金沢の歴史と文化」について講演を伺った後郷土料理を食し、大浴場で温泉につかりました。２日目は、兼六園で記念撮影後、半数はバスで妙立寺へ向かい、館内のからくりを見学し、残りの半数は、石川県立金沢商業高校ツーリズムコースの生徒の案内で、兼六園を見学しました。それぞれの見学後は昼食を含む班別自由研修を行い、その後白川郷へ向かいました。班ごとに合掌造りの建物の内部や集落の風景を見学した後、高山市内の宿舎「ホテル・アソシア」では、フランス料理のテーブル・マナーを体験し、地元の方々のご指導のもと民芸品の「さるぼぼ」を作りました。３日目は、班ごとに、陣屋、朝市、古い町並みなどを見学し、それぞれ昼食を済ませた後帰路に向かい19:00西宮北口で解散。天候、健康に恵まれ、参加者全員が、３つの班別研修全てに参加しました。生徒140名。引率は、教員７名、看護師１名、添乗員２名。

（Ｊ３学年主任）

S1一泊研修（近江八幡）

Ｓ１生徒は、10月16日（木）～17日（金）の一泊二日で、近江八幡方面へ一泊研修に行きました。この一泊研修の最大の目的は、休暇村での「話し合い」にあります。生徒たちは20班に分かれて「４年後の理想のわたし」について話し合い、次に別のメンバーで20班に分かれて「結婚はするべきか否か」について話し合いました。日頃よく話す仲間とは違うメンバーでの話し合いに、当初は戸惑いもあったようでしたが、新たな人間関係の中で発見もあったようで、楽しく議論できたようです。話し合い後の夕食時間にも議論の続きをしていた人もいました。夕食後には一転してレクリエーションをしました。委員たちが企画したゲームなどで大変盛り上がり、楽しく過ごすことができたようです。

翌日は、近江八幡市街を見学しました。今年はヴォーリズ没後50周年記念企画展が行われている特別な機会で、通常は見ることが困難な施設もいろいろ見て回ることができました。ヴォーリズ記念館、旧八幡郵便局など点在する様々な施設で生徒たちの姿が見られました。生徒たちは、日頃過ごしている神戸女学院の建物との類似点をいろいろ発見し、見学を楽しむことができたようです。

この他にも17日の往路では彦根城、18日の復路では琵琶湖博物館を見学しました。琵琶湖博物館にはNHKの取材クルーが来ており、後日のニュースで生徒のインタビューが流れておりました。

（Ｓ１学年主任）

S2修学旅行　10月13日(月)～17日(金)

長崎国体に対処するため、今冬より学年団はコースの検討、及び代替地の検討を開始し、延べ３回の現地視察を経て佐賀県の名護屋城での歴史・人権学習、大牟田発の自主研修を新たに組み込み、大牟田での宿舎も新規開拓した。

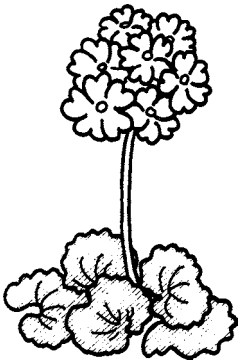
12日(日)も関係教員は学校に集まり、台風上陸を踏まえた対応を協議し、13日(月)朝を迎えた。やはり台風は九州に上陸し、我々はそこに向かって西へ向かう。出発時、新幹線は30分以上の遅延をJR側は告げていたが、１分も遅れること無く博多駅に到着。降雨、強風の中、バスも出発。特に橋梁通過時は、船が大波に揺らされるかの如くバスは揺れた。３連休の最終日であったが、観光の車は無く、スーイスーイとすべて予定通り移動できた。厳しい状況の中で、これ以上無いほどの上々の１日となった。

14日以降は天候面では、ほぼ晴天に恵まれた。修学旅行実施にあたり、何よりも大切なことは生徒の安全である。よって阿蘇山火口見学を避けるコースを設定した。ただ、生徒にとっては高校の修学旅行は一生に一度。現時点で可能な限り、充実したコースを保障してやりたいという思いで工夫した。

全行程を通して生徒たちの言動は立派で、礼儀正しく、そして他者への心優しい声かけができる子が多く目についた。悦ばしきことこの上無し。

６名の教員の引率で今年度の修学旅行を無事実施した。

（S２学年主任）



S3遠足報告

10月17日（金）に京都嵐山に遠足に行って参りました。朝８時30分に西宮北口県立芸術文化センター前を出発し、名神高速道路、京滋バイパスを経由して、最初の目的地である八つ橋庵ししゅうやかたに到着しました。ここでは、餡入り生八つ橋の製作体験をしました。まず、予め配合された粉に水を加えて練り、蒸篭で蒸して生地を作りました。蒸しあがった熱々の生地を３等分し、ニッキ、ココア、食紅を加えて色と風味を付けました。それらに粒餡、チョコ餡、いちご餡をそれぞれ包んで、３色生八つ橋の出来上がり。その場で食べる者あり、容器に入れて持ち帰る者あり。和菓子作りを楽しみました。

再度バスに乗車し、国道９号線を経由して、最終目的地の嵐山に到着しました。ここでは、まず渡月橋をバックにクラスごとに記念撮影。それから食事までの小一時間、グループに分かれて自由に散策を楽しみました。川沿いに吹く風は、かなり冷たかったです。12時25分に、食事会場である渡月亭の大広間に再集合。みんなで礼拝を守り、食前感謝を捧げて、京懐石を美味しくいただきました。２段のお重にきれいに盛り付けられたお料理が出され、湯豆腐鍋が添えられました。質、量ともに申し分なく、話に花を咲かせながらの楽しい会食になりました。

予定より少し早く13時35分に現地で解散。その後は、思い思いに京の街を散策したようです。事故もトラブルもなく、全員元気に帰宅しました。

（Ｓ３学年主任）

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、Ｊ２とＳ２は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選者を決定した。また、校内選考で決定された優秀作は兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選４名、入選２名に入賞した。

11月６日（木）の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、Ｓ2Ｃの生徒が自作（兵庫県青少年読書感想文コンクール毎日新聞社賞受賞）の朗読をした。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

個人情報保護のため、一部削除しています。

芸術鑑賞会報告

「この物語は、阪神淡路大震災で被災された方々、東日本大震災で被災された方々、そして日々、命の最前線で闘う消防士の方々にささげます。」

劇団ピープル・パープルによる「ORANGE」は、このセリフから始まります。

2000年に旗揚げした若い劇団である彼らが、初めて学校公演として「ORANGE」を上演したのは6年前の本校でした。予算的にも厳しい条件に応じてくださったのは、被災地を通学圏とする本校の生徒に、震災の真実を語り継いでほしいという劇団員の皆さんの熱い思いからでした。そして6年、在校生も一新し、さらに東北での震災も記憶に新しい今、是非とも再演をとの要望に快諾をいただき、今年度の芸術鑑賞会として実現しました。

11月7日金曜、開演13時30分。6年前と同じくアミティホールの舞台上は、消防署を想起させる鉄骨が組まれ、しかしそれは回想の中では瓦礫の街の倒壊した建物となり、後半では要救助者を阻む火事の現場の工場ともなるのです。こうした演劇ならではの「想像力」を刺激されながら、誰もがその臨場感に圧倒されつつ、生と死のはざまに繰りひろげられた消防士たちのドラマに触れました。

「本当に涙が止まりませんでした。私は神戸で育ち、小さい頃から小学校でもどこでも震災のことを教えられ、1月17日には歌を歌うということを毎回のようにしていました。そのせいでどこかめんどくさいという気持ちが大きくなっていたような気がします。震災のことを思い出してこうだったとか教えてもらうのが当たり前だと思っていましたし、話している人がどんな気持ちで話してくださったか、その日々はどれほどまでにつらくて苦しい日々だったのか、この劇を観て、今本当に理解できました。毎日を大切に生きようと思いました。家族をもっと大切にしようと思いました。」（J3生徒　感想文より）

今回、中学生の感想の中で、「震災について両親はあまり多くを語ってくれない」という一節を度々目にしました。20年の月日が流れても消えることのない心の痛みを抱え、被災した方々は日常を過ごしています。それらは言葉にするのも困難で、また伝える側と伝えられる側の温度差も気になります。しかしそれだけに、こうした演劇などのメディアを通して感動を共有し、共に涙し、共に語る経験は貴重であったと考えています。

「これからも国も混乱する規模の災害が起こると思いますが、その時もまた人の心の強さを思い知ると思います。そして私も強くなって、それらを乗り越えていける気がします。その自信を持てたのはこの劇のおかげです。」（J2生徒　感想文）

震災の悲惨さを伝える映像などは多くあります。しかしそれらとしっかり向き合う勇気を与えてくれたこの作品との出会いは、深く意義あるものであったと感じています。

（視聴覚委員会）

中高部キャンパス見学会

11月１日（土）、キャンパス見学会が行われました。少し小雨がぱらつく天気でしたが、昨年より多い来校者（1139人）があり、盛況でした。

午前中は、入学試験説明会、学校説明会（生徒による英語スピーチ、卒業生によるスピーチ、教員による教科プレゼン）、中学部自治会メンバーによるキャンパスツアーなど学校を紹介するプログラムを中心に進め、午後はより授業や学校生活を体験してもらえるように、教員による模擬授業や、生徒によるクラブ活動を中心としたプログラムで行われました。

今年からの新しい取り組みとしては、各教科が日ごろ授業でどのようなことをしているかを体育室で展示し、教員が来校者の質問に答えるようにしたことでした。

これを実施するに当たり、夏休み中に教科内で話し合いをもち、夏の研修会において教職員の前でプレゼンをするという準備をもちました。これは、各教科・各教員が自分たちの取り組みを他の先生方と共有することができ、また自分たちがするべきことを再確認することができて、教職員にとってもとても良い方向に働く企画となりました。来校していただいた方にも「よくわかりました。」と好評でした。

神戸女学院が素敵な学校であるということをアピールするために、教職員・生徒が、一同となり取り組めたと感じています。「なんて素敵な学校だ。入学したい。」と思ってもらえたら幸せです。

（校務課長）

「秋の子ども会」報告

去る11月22日、さわやかな秋晴れの中、秋の子ども会が開催されました。当日は、有志のグループリーダーと高等学部の新旧役員会のメンバー、そしてＳ化学部のメンバーが入念な準備をして、神戸真生塾の子どもたち18名の到着を待ちました。

朝10時過ぎに開会、最初に礼拝の時を持ち、今回の実行委員長であるＳ３生徒による開会宣言がなされた後、Ｓ化学部の協力のもとで葉脈しおりやスライムの作成に取りかかりました。子どもたちはまるで「実験」のような工作に顔を紅潮させ、生き生きと自らの「作品」を作り上げていました。

お昼は、Ｓ役員会の新メンバーが腕によりをかけたハヤシライスとポテトサラダが試食室にて振るまわれました。お代わりする人も続出し、お腹も心も満足できるひとときとなりました。

午後は、グラウンドで鬼ごっこをしたりテニスをしたりと思い思いに楽しい時を過ごしました。そして、午後２時過ぎに、役員会メンバー手作りのプリンをいただいた後、子どもたちは、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られ、笑顔で帰って行きました。

スタッフの尽力で、すべてが非常にスムーズに進行した一日でした。秋の子ども会を成功に導いてくださったすべての方々に心より感謝申し上げ、「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は、４名でした。

（高等学部役員会顧問）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］　**Ｊバレーボール部**

部　長

Ｊバレーボール部日々の活動

私達は年５回の公式戦に向けて土、祝日は練習試合を重ね、放課後は毎日練習しています。試合に勝つ喜びや負けた時の悔しさを経験し、努力を続ける大切さを学び、日々成長していく自分を実感しています。昨年度は西宮市参加23校中第５位（阪神大会出場）、阪神大会ではベスト８に入りました。練習にOGの先輩が来てくださると、バレーボールのアドバイスはもちろん、将来について相談に乗っていただけます。先輩と後輩の縦の繋がりと同学年の横の繋がりを大切にし、これからも文武両道で頑張ります。

［クラブ］　**Ｊコーラス部**

Ｊコーラス部は、文化祭をはじめとする校内ステージの他、近年は、コンクールにも挑戦しています。今年度は、部員数14人で、複雑なハーモニーを持つ難曲ジェンジェシ作曲「詩編95編」に、取り組み、順位は今ひとつであったもののレベルの高い演奏ができたと思います。他にもＳコーラス部と合同で他校との混声合唱、学院クリスマスでの聖歌隊としての奉仕など、幅広く活動しています。

（Ｊコーラス部顧問）

［クラブ］　**Ｓバドミントン部**

部　長

私達は年に数回行われる試合に向けて、日々練習をしています。基本的に中高合同で部活をしていて、指導者がいないために高校生が中学生に教える機会が多くあります。他校とは違い、不利ともいえる環境ですが、今年の９月に行われた西宮市大会個人戦でダブルス、シングルス共にベスト８まで勝ち進むことができました！

何から何まで教えてくださった代々の先輩方、関わってくださった先生方、そして現ＪＳバドミントン部の部員に感謝して、これからも向上できるように精一杯努力していきたいと思います。

［クラブ］　**Ｓギター部**

ギターの魅力は、時には主旋律を奏で、時には伴奏をつとめる多様性であると考えます。10人前後という少人数のＳギター部でも、そうしたギターの特徴を最大限に活用し、ポップス・ロック・クラシック・ボサノバなど多彩な音楽に挑戦しています。

今年度の夏合宿では、岐阜県可児市のヤイリギターの工房を訪れ、材料の木に触れるところから１本のギターができるまでの工程を見学し、ギターの魅力を再発見することができました。この素敵な経験はこれからの演奏に生かされると期待しています。

（Ｓギター部顧問）

〈学 院 日 誌〉

9 月10日(水)	中高部教員会議
9 月19日(金)(校内用)・20日(土)(校外用)	中高部文化祭
9 月24日(水)	理事会 中高部教員会議
9 月30日(火)	中学部入試説明会
10月 8 日(水)	中高部教員会議
10月12日(日)(創立記念日)	重要文化財　神戸女学院　指定記念講演会
10月13日(月)～17日(金)	高等学部修学旅行
10月15日(水)～17日(金)	中学部小旅行
10月17日(金)	教授会
10月22日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会 中高部教員会議
11月 1 日(土)	キャンパス見学会
11月 5 日(水)	中高部教員会議
11月19日(水)	中高部教員会議
11月21日(金)	教授会
11月26日(水)	理事会
12月 3 日(水)	中高部教員会議
12月17日(水)	理事会
12月18日(木)	中高部教員会議
12月19日(金)	教授会

目　次

「温故知新」…… 1
「重要文化財　神戸女学院」指定記念行事報告… 3
「重要文化財神戸女学院」ヴォーリズ建築の一般公開について… 4
神戸女学院家庭会報告…… 4
春季公開講座報告…… 5
2014年度　愛校バザー会計報告…… 5
学院リトリート報告…… 6
秋季公開講座報告…… 6
2014年度　宗教強調週間…… 7
KCC だより …… 9
退職のことば……11
人事・慶弔・栄誉・永年在職者表彰・記念賞…12
その他の新刊一覧……13
新刊紹介……13
留学報告……15
史料室の窓・クラークソン先生……16
オフィスの宝物……17
大学報告
　子どものための七夕コンサート……18
　心理相談室公開講演『子どものネガティブ行動に対処する』…18
　特別講演「特権と抑圧は表裏一体」……19
　ESD プログラム報告会……19
　企業訪問　～学生のよりよい就職のために～…20
　地域創りリーダー養成プログラム発表会……20
　子どものためのスペシャル・コンサート……21
　第 5 回絵本翻訳コンクール……21
　留学生紹介……22
　受入れ留学生報告……22
　派遣留学報告……23
　語学研修報告……24
　プロジェクト科目報告……26
　音楽学部夏期講習会報告……28
　保護者懇談会報告……28
　夏期インターンシップ実施報告……29
　インターンシップ参加報告……29
　2014年度秋季大学教授会研修会報告……30
　2014年度大学職員 SD 研修会 ……31
　陽～ひだまり～となった岡田山祭2014……32
　大学クローバー賞表彰式……32
　2014年度「めぐみ会賞」について……33
　私の研究……33
　ゼミ紹介……34
　課外活動紹介……35
中高部報告
　ヴァージニア・クラークソン記念館の竣功…36
　中学校女子サッカー部フェスティバルに参加して…37
　高等学部校内大会……37
　中学部校内大会……38
　釜ヶ崎訪問報告……38
　私たちにできること 私たちにしかできないこと…39
　広島訪問に参加して……39
　リーダーシップトレーニングキャンプ……40
　2014年度夏山登山―白山……40
　2014年度訪豪研修旅行報告……41
　中高部 教職員研修会 ……42
　文化祭……43
　Ｊ１秋の遠足……44
　Ｊ２秋の遠足……44
　Ｊ３小旅行……45
　Ｓ１一泊研修（近江八幡）……45
　Ｓ２修学旅行……46
　Ｓ３遠足報告……47
　校内読書感想文コンクールについて……47
　芸術鑑賞会報告……49
　中高部キャンパス見学会……50
　「秋の子ども会」報告 ……50
　課外活動紹介……51
学院日誌……52